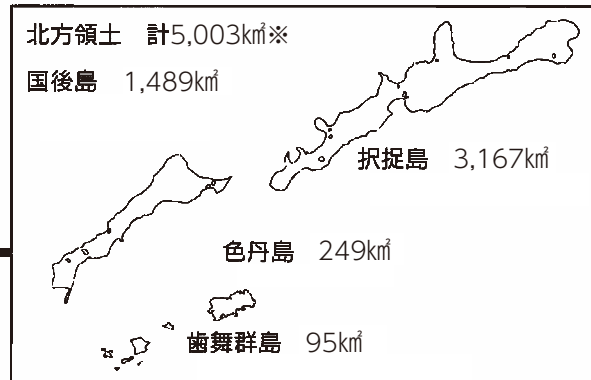


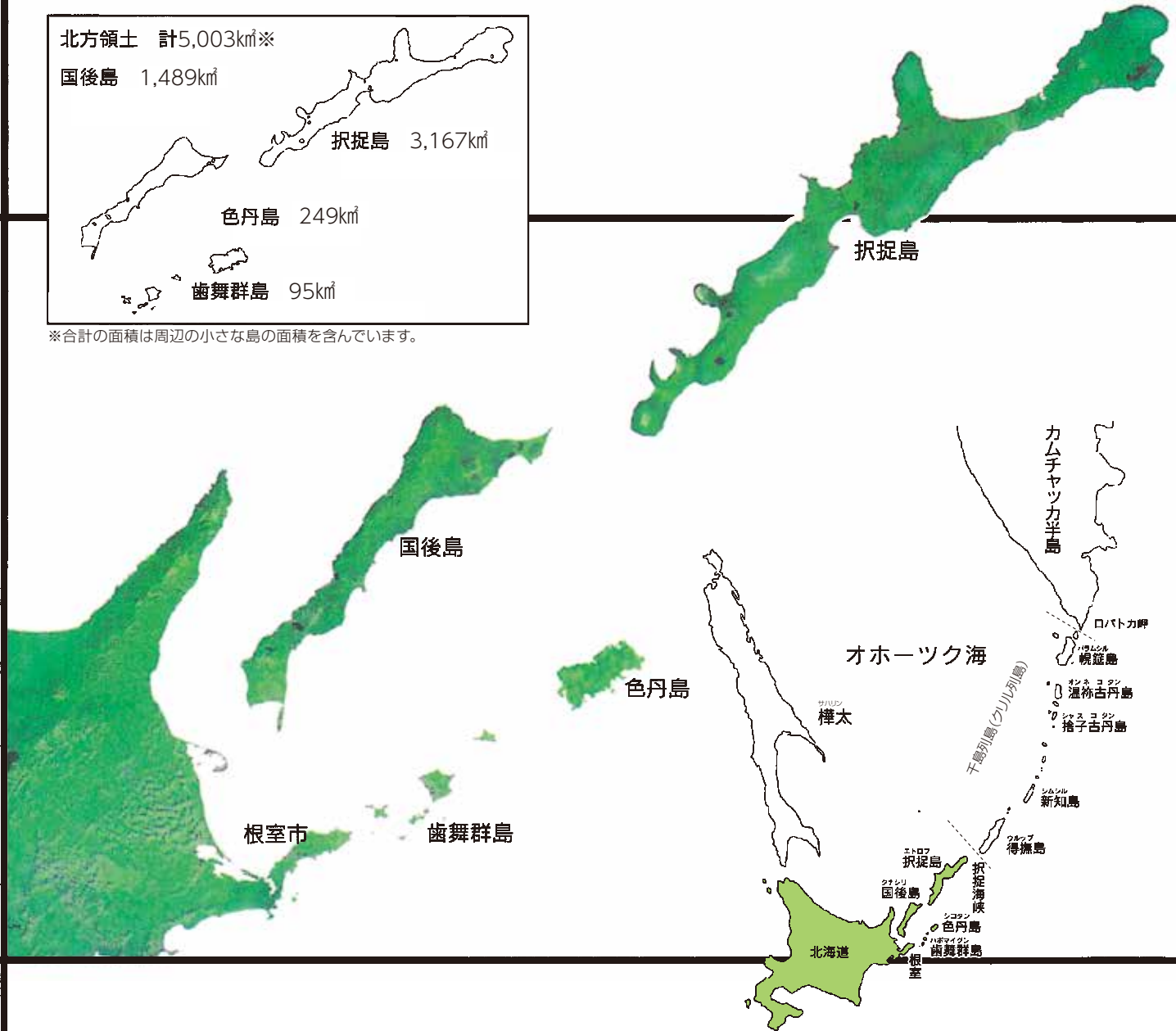
北方領土の早期返還を求めて

第28回「元島民の北方領土を語る会」集録

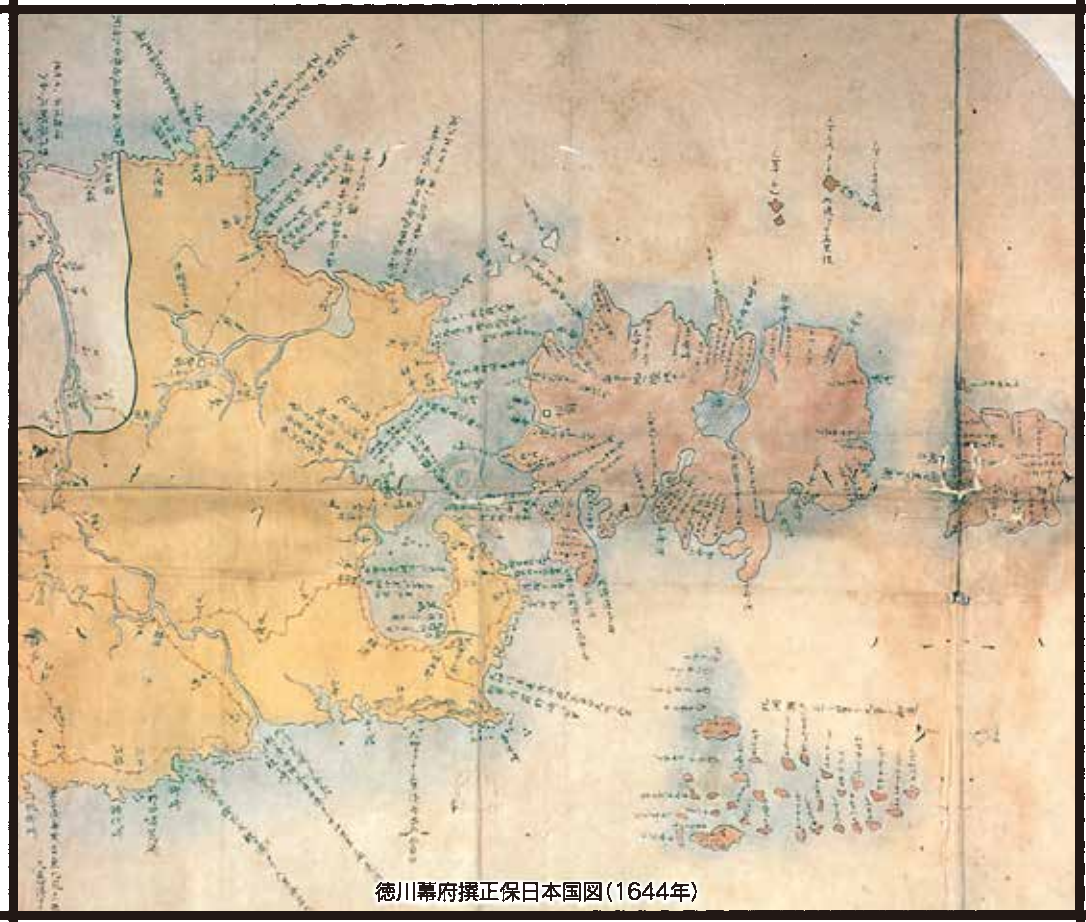
私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多摩島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



※合計の面積は周辺の小さな島の面積を含んでいます。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)

声届け 開けよう扉 四島返還

(平成29年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主 催 / 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

平成29年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第28回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成30年3月

編集／~~編集~~ 北方領土復帰期成同盟

〒060-0001

札幌市中央区北1条西3丁目3番地

敷島プラザビル3F

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

印刷／株式会社 正文舎

も く じ

| | | |
|---|------------------------------------|--------------|
| 1 | 平成29年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱 | 2 |
| 2 | 平成29年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況 | 3 |
| 3 | 「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて | |
| | ○ 北方領土返還要求運動について | 北方領土復帰期成同盟 4 |
| | 【北海道会場】 | 6 |
| | ○ 択捉島元島民 | 山本昭平 |
| | 【福島県会場】 | 13 |
| | ○ 択捉島元島民 | 山本忠平 |
| | 【静岡県会場】 | 22 |
| | ○ 択捉島元島民 | 安田愛子 |
| | ○ 志発島元島民二世 | 神林美砂 |
| | 【鹿児島県会場】 | 31 |
| | ○ 国後島元島民二世 | 金田慎吾 |
| | ○ 多楽島元島民 | 河田弘登志 |

1 平成29年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

北方四島は、終戦直後に不法に占拠されたまま戦後70年を超えてなお、ロシアに実効支配されたままであり、故郷に帰る日を待っていた元島民も既に半数以上の方が亡くなっている。

これまで日本政府は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、解決への道筋は見えていない。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。

この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

4 開催時期

平成29年7月～平成29年12月

5 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟（10分）

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世（20分）

北方領土元島民（40分）

2 平成29年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

| 開催月日／開催都市 開催団体 | 参加者 (人) | 語り手 出身島 | プロフィール |
|---|------------|--------------------------------|---|
| 7月27日(木) 北海道帯広市 帯広市婦人団体 連絡協議会 | 45 | 山本 昭平 択捉島 | 昭和3年4月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還 平成9年 千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長 平成21年 〃 〃 退任 |
| 8月2日(水) 福島県いわき市 いわき市地域婦人会 連絡協議会 | 120 | 山本 忠平 択捉島 | 昭和10年1月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還 昭和28年 神戸海産物(株)に入社 その後、転職を経て平成11年定年退職 |
| 10月5日(木) 静岡県忍野村 山梨県連合婦人会 | 140 | 安田 愛子 択捉島 神林 美砂 志発島二世 | 昭和14年11月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還 職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ |
| 11月7日(火) 鹿児島県鹿児島市 鹿児島県地域 女性団体連絡協議会 | 80 | 金田 慎吾 国後島二世 河田弘登志 多楽島 | 職 業 税理士 昭和36年 札幌市生まれ 昭和59年 金田税理士事務所入所 平成11年 金田慎吾税理事務所開設 職 業 団体役員 昭和9年9月 多楽島生まれ 昭和20年11月 多楽島から引揚げ 昭和33年～平成7年 根室市役所勤務 平成9年 千島歯舞諸島居住者連盟理事 平成25年 (公社)千島歯舞諸島居住者連盟副理事長 |

3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日は、お忙しい所たくさんの皆様にお集まり頂き、元島民の語る会を開催させて頂き、厚くお礼申し上げます。

また、お集まりの皆様方には、日頃から北方領土返還要求運動にご理解、ご協力いただき、深く感謝申し上げます。

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で72年となりました。

北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領については容認したものの、北海道の北半分の占領は認めませんでした。

そのためソ連軍は、アメリカ軍の不在が確認された北方四島に兵力を集中し、昭和20年8月28日～9月5日までの間に北方四島の全ての島を占領しました。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことが出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

もし北方四島がアメリカの占領下に入っていたら、沖縄と同じように返還されていたかもしれません。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、外交交渉を続けてきております。

昨年12月、11年振りにプーチン大統領が来日し山口県長門市にて首脳会談が行われ、また本年4月にはモスクワで首脳会談が行われました。

その際、元島民の方々のための航空機での墓参が合意されました。この6月に実施予定でしたが、当日は国後島に濃い霧が発生し残念ながら中止となってしまいました。しかし高齢となられた元島民の方々のため、年内に再度実施する方向で検討しているとのことでした。

元島民の平均年齢も80歳を超えました。元島民の方が、一人でも多くご存命のうちに、北方領土が返還され、自由に故郷へ帰れる事を願って止みません。

そのためにも、外交交渉の下支えとなる国民世論の結集、皆さんたちの北方領土返還要求に対する大きな声が必要なのです。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて70年以上の長い時間が経ち、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者も高齢化が進みました。

そのため、これからの返還要求運動を引き継いでくれる若い世代の方々の参加が必要不可欠です。

北方同盟としては返還要求運動を粘り強く展開し、次代の世代に対する返還要求運動への参加を推進するとともに、北方領土問題を風化させぬよう努力いたします。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

択捉島元島民 山本昭平さん

皆さん今日は。私は今埼玉県に住んでおりますけれども、帯広は非常に暑いと聞いていたのですが、埼玉県は熊谷市の方ですので非常に暑いです。行田市は、熊谷の直ぐ隣りですから熊谷イコール行田市と考えて頂いてもよろしいです。湿度が高く、同じ30℃でも帯広とは違います。今日は清々しい気持ちでお話をさせていただきます。

私は昭和3年生まれです。昭和14年小学5年生の時、進学のため親元から離れて一人で旭川の親戚の家に寄宿しました。昭和20年の終戦の年、7月に択捉島の家に戻ったのですが、帰る途中で根室大空襲に遭遇し父親と小野田さんという薬取村役場の助役さん、佐藤さんという若い40歳代のお医者さんの3人を、浦河丸事件とも言いますがこれで亡くしました。その時、女学校2年生だった妹も一緒に乗っていましたが、辛うじて私と妹が助かり、他の方々はほとんど全滅状態でした。

私達が乗っていた浦河丸の船の後部デッキの上にあった2等船室に、米空軍のロケット弾が直撃して部屋が吹き飛び、その部屋にいた13人のうち生き残ったのは私と妹だけでした。驚いた事に、この船には択捉漁業会社に出稼ぎに行く人々が150人ぐらい乗っていましたが、乗船当初は知りませんでした。船室を破壊されたため逃げて船底に行った時に初めて分かったのです。

女工さんもいたし、出稼ぎに行く東北の人達が船倉にある蚕棚の様に仕切られた所にいたのですが、船腹の真ん中にロケット弾の直撃を受けて海水が瞬間に入ってきて、僅か10分間で船が逆立ちして沈みました。

それで私と妹は島にも帰れず、結局は根室で知り合った根室支庁職員の高橋光さんという方に助けて頂いて、旭川の親戚に連絡して衣類とかを送って貰いましたが、乞食のような格好で妹と二人、島に戻ったのは8月5日でした。それから10日程で終戦になりました。

終戦直前は、多分制海権とか制空権はすっかりアメリカに握られていて、米軍の飛行機がブンブン飛んで来ても日本の飛行機は一機も迎撃に出ません。完全にアメリカ軍が攻勢、海は海でアメリカの潜水艦がうようよしていました。ですから、根室から島へ渡るにしても我々民間人でも命がけだったのです。誰も命の保証などしてくれません。ただ死んだら死に損です。

この様な状態で終戦を迎えたものですから、何処の国の軍隊が来るのかを考えた場合、一般的には当然アメリカだろうと考えていました。ところが終戦直後の情報が全くなく、結局我々はソビエトの軍隊が島に入って来るまで全く解らなかったのです。「日本の国は一体何をやっているんだ」という国に対する不信感や、悔しさという強い思いがありました。

あれだけ我々国民に対して「戦争は勝たねばならぬ」とかハッパを掛けておきながら、戦争が終わった、戦争に負けた途端に何もしてくれない。情報の一片すら流してくれない、しかも定期船も途絶してしまっただけでなく、択捉島から逃げ出したいけれども、小さな船では本国には渡れないのです。国後島など本国に近い地域の人々は、夜な夜な小さな発動機船で逃げて来た人もいましたが、非常に危険な賭みみたいなものでした。

そのような中、終戦直後は一体どこの国の軍隊が来るのかということが、我々の非常な関心事でありました。

皆さんお手元のパンフレット「北方領土ってどんなところ」4～5頁をお開き下さい。ご覧になるとお分かりと思いますが、択捉島が一番大きくて私の住んでおりました薬取という所は島の

一番北の握りこぶし位の大きさです。

択捉島は島の長さが200km強で非常に長いです。島の回りは約1,100kmあります。昔の人が測った約280里を換算すれば約1,100kmになります。ですから非常に長い海岸線を持った島です。

ソ連軍が上陸したのは、昭和20年8月29日、択捉島の留別という所です。択捉島のオホーツク沿岸、真ん中に散布山があり手前に紗那、留別村があります。この留別湾に、最初にソ連の軍隊が駆逐艦に乗って500名位上陸したと言います。

その時、留別ではソ連が来た状況が判らないまま村にソ連軍が入って来た。ですから日本とソ連の両軍による一発の弾の撃ち合いもなく、無血開城の穏やかな状態でした。ただ、上陸後直ぐに郵便局が制圧されてしまいました。留別郵便局は択捉島の電話中継局であり根室局との有線電話の基地局でもあったので、根室との通信は出来なくなりました。薬取村は島の一番端っこになりますから、電話が通じないという事はソ連軍が留別に上陸してもどうなっているのか、その情報が一切入らないのです。

当時、我々戦争に負けた国民は「戦勝国に何をされてもしょうがない」というある種の諦めの認識がありました。現に、今もあちこちの紛争地で残虐行為が行われている事を聞きます。ですからソ連軍が留別でどのような事をしているのか、紗那村にも入ったらしい、その紗那でもどんな事になっているのか、一切情報が入ってこないのです。

島民は皆戦々恐々として、若い女性などは顔に墨を塗り男装し、いつ薬取に来るのかを心配しながら待っているのですが一向に情報が入って来ない。1ヶ月過ぎても来ない、そうこうするうちに9月末頃、薬取に女の兵隊1人と付き添いの兵隊2人が馬でやって来ました。女性兵士の首には「この馬に飼い葉と水をやって下さい」と日本語のプラカードが掛けられていたそうです。

私は見ていませんでしたが、この話がパーッと村中に広がりました。「女の兵隊が来た」と。しかし考えて見ますとそれはソ連軍の斥候だったと思います。私が学校で習った軍事教練では日本の軍隊では、通常斥候を出す場合は自分の部下を出します。ソ連は隊長である将校自らが先頭に立って斥候に出ます。それが最も正確な情報と判断が得られます。おそらく噂の女の兵隊さんというのは女性将校と副官の下士官兵だと思いました。大騒ぎの翌日役場から回覧板が回りました。

それは10月〇日にソ連軍が村に侵入する。ついてはソ連軍が村に入るとき村民は絶対外に出てはいけない。窓から覗いてもいけない。戸外に洗濯物を干してはいけない。等々非常に厳しい事が回覧板で回りました。

もう一つは、択捉島は熊が非常に多い所です。それに水鳥も多いのです。ですから村の人達は鉄砲などを持っている人が沢山います。村田銃という単発式、口径が太く、一発で熊を仕留める事ができるもの、同じくブローニングという口径の太いアメリカ製の連発銃、ウインチェスター散弾銃、ラジオ、刀剣、通信機器など一切切切役場に出しなさい。役場ではこれらを村民の武装解除という形でソ連軍に差し出します。という事が書いてありました。提出期限は1週間以内ということでしたので、我々はその通り纏めて提出しました。

そして10月5日か6日か10日頃、日にちは忘れましたが、いよいよソ連軍が村に入ってきました。

天気が続いておりまして、朝6時にトッカリモイ岬、村の入口に当たる浜に集結してしきりに鉄砲を撃っているのです。鉄砲は日本人を威嚇するために撃っているのか、水鳥、カゴメやカラスもトッカリ（あざらし）も沢山いますし、それに向けて撃っているのか、解りませんがバンバンとの凄惨な銃声でした。これが一段落しましたら、馬が3頭いきなり家の前を駆け抜けて行き

ました。後で名前が解りましたが先頭にはシネリニコフという中尉と後の2頭は副官2人が自動小銃を担いで一瞬で通り過ぎて行きました。窓からそっと覗いていたのです。恐らく村の奥手に川畑という番屋があり、ここを彼らの兵舎に使うため見に行ったらしく直ぐに駆け戻って行きました。

約30分後、兵隊が村に入ってきました。乗馬のシネリニコフ中尉を先頭に副官2名が馬で、兵士が2列縦隊で続いて入って来ました。

私は旭川で伯母宅に下宿しておりましたが、伯母はカトリック信者で日曜日毎に教会へ連れて行かれました。私は何の事か分からずについて行くと、教会には沢山信者が来ていますが、その中に白系ロシア人やポーランド人が何人かおられました。非常に背が高く、厳めしい顔形と体つきを見ていましたから、そのような男たちが来ると思っていました。ところが豈図らんや、入って来た兵隊たちは私と同じ位の16、7歳位の少年でした。顔や手は垢で真っ黒になっているのです。目だけ光っていました。軍服も何年も着たままで垢でビカビカに光っている。靴は皮の半長靴を履いています。持っている銃は素晴らしい銃をもっています。皆さんはカラシニコフという銃の名をお聞きになることがあると思います。当時は未だカラシニコフ銃はなかったですが、自動小銃とライフル銃を持っているのです。ただし所持品は貧しく「これでよく戦争に勝ったものだ」と思うほど酷い格好で、村に入って来ました。彼らの顔は、私と同年輩に見えましたから何か話し合えるのではないかと、話しかけやすい兵隊だと思いました。30人位の兵士が川畑番屋の兵舎に入りました。

そのうちに役場から「11時に戸主は役場前に集まれ」と伝言がありました。役場は村の略々中心地にあり、道路幅が膨れていて広場のようになっています。そこに行きました。そこには何時来たのかソ連軍の司令官らしい勲章を沢山付けた厳めしい軍人たちが6～7人、消防ポンプ小屋の傍の火の見櫓の基礎の小高い所に立っていました。

司令官の話が始まりました。これを通訳したのは何と日本の兵隊さんでした。若くて見るからに弱々しく今大学から軍隊に入ったばかりのような、眼鏡をかけ青白いタイプ、その人が通訳らしいのです。私はどんな事を通訳するのか聞いておりました。その人は司令官の言葉を同時に通訳するのです。凄いと思いました。戦争に負けた事など忘れて、司令官が言う言葉をどの様に通訳するのかそればかり聞いておりました。素晴らしいと思い、勉強しなければ駄目だと、とんでもない時にそのような思いをしました。

初めてロシア語を聞いて気になったのは、司令官はしきりにカトールイ、カトールイという言葉を使うのです。カトールイとは何だろう。「お前たちは戦争に負けた、下等類だ、下等動物だ」と揶揄されているような不快な感じを受けました。司令官の話はこうでした。「この戦争はソビエト軍が勝利した。そしてこの島を占領した。今日からソビエト軍が軍政を布きます。ついてはあなた方の生命と私有財産を保証します。」

いの一番、この発言がありました。命の保証、この言葉を聞いて非常に安心しました。その他占領政策について夜は何時以降外出してはいけない等々細かい説明がありました。2～30分位で集会が終わり解散しました。

この集会が終わって30分位したら、口伝で「家宅捜索だよ」と連絡がありました。「来たか」と思いました。ソ連兵が3人一組で一戸ずつ入ってくるのです。家は商売をしており、道を挟んで店舗と住宅、倉庫も二つ三つありました。ここを全部、米びつまで開けさせ押入れの布団や行李、箆筒の底まで全部調べられた訳ですが、彼らが最初ドカドカと家に入って来た時、私は父が根室で死んでおり、家族は祖母、母、弟妹たち7人、私が長男ですからこの家族に怖い思いをさ

せてはいけないと思い、直ぐに玄関に出るとソ連兵はロシア語で「これから家宅搜索を始める」というような事を言っているらしいのですが、何を言っているのか解りません。当時、私は未だ17歳でしたから子どもっぽかったらしく、「パパ、ママ、父親か母親を出せ」と云ったのでしょう。パパ、ママという言葉聞いてこの言葉は万国共通だという事を理解しました。余りにモタモタしていると、彼らは私を押しつけて「案内しろ」という素振りで見と顔で指示し、一人が私の背中に銃口をつけて「押入れを開けろ」とか「家族はこれだけか」とか色々聞かれます。その時、私は根室空襲で生き残っていた事を「何故自分だけが生き残っているのか」という気持ちがあって「殺すなら殺せ、これからお前たちに苦しめられるくらいなら、撃ち殺された方が楽でいいや」という、やけくその気持ちでいたのですが、でも「自分が死んだらこの家族はどうなるのだろう」と考えた時、うかうかした事も出来ないし非常に用心深さというものを考える様になりました。

この様にしてソ連軍侵入第一日が過ぎました。ところが夜になって2人の兵隊が私を呼びにきました。私は「下手をしたら殺されるかも」と思って兵舎へ出掛けました。兵舎へ入りますと、兵士が両脇にずらりと並んでいて奥の方にシネリニコフ中尉と他の部落から来た別の将校がいて、身振り手振りで「お前、腕時計を持っているだろう、それを俺に売ってくれ」というのです。

「クピ、クピ」とか「ジェンニギ」「スコーリカ」という言葉をいうのです。「ジェンニギ」とは多分お金だろう、多分時計が欲しいのだろう、そう思って時計を渡して、身振り手振りでお金は要らないと言って帰ってきました。ただし帰って来る時が一番怖い思いをしました。行く時は、自宅から2人のソ連兵と一緒にでしたが、帰りは何もしてくれないのです。「帰ってよろしい」と言われましたが真っ暗なのです。

村には電気がありませんのでランプ生活です。町中は道路が真っ暗闇です。この中を帰されるわけですから、何時後ろから「ズドン」とやられるのではないかと考え、これが一番怖い思いがしました。母も昭平はこれでいなくなるのではないかと、殺されるのではないかと非常に心細かったという話を後でしておりました。この様に占領には嫌な思いがあります。

皆さんも、戦争というものがどんなものかは私が申し上げなくともお分かりと思いますが、戦争で一番被害を受けたのは国民です。戦後、満州では大変な目にあっております。それに比べて島ではそのような事はありませんでしたが、敗戦国の国民は今述べたような思いで過ごしました。

ソ連軍薬取警務隊長シネリニコフ中尉が、日本人住民の信頼を得た事が一つありました。北方四島は米が獲れませんから、全て内地から持って来なければなりません。敗戦の時、薬取村には米が全くありませんでした。私の店が米の配給所でしたからよく知っていたのですが、私が村に帰って8月の6～8日頃、最後の米を配給すると云われ母と一緒に店に立って秤で配給しましたが、その時には店の蔵には一粒の米も残っていないのです。目前の冬を控えて村民はどうなるのだろうかという、非常に大きな不安がありました。

話が前後しますが、終戦と同時に薬取村から少し離れたトウロという所に日本の軍隊が駐屯していました。旅団ですから数百人規模と思いますがこの兵隊さんが武装解除し、そのうちの百名程が薬取にきました。その人達は薬取村から定期船を待って本州に帰るつもりで来たのですが、その時既に遅く定期船は途絶し兵隊さんたちは薬取に永住しなければならない状態となりました。

ところが薬取村としては、例え兵隊さんが村に留まったとしても食料が無い、そのため村はトウロの旅団司令部に掛け合って旅団の備蓄米を分けてもらいました。条件として米以外に軍の乾燥味噌、乾燥醤油を村民の人頭割に分配して貰い、食い繋いでいました。

ところがシネリニコフ隊が来て12月ころになると、その米も尽きました。村は「米が無い、何

とかしてくれ」とシネリニコフ中尉に頼んだところ、「俺が交渉する」というので別飛まで我々と発動機船で赴き、彼が別飛のソ連軍に折衝し薬取に運んできました。

ところが、シネリニコフ中尉が我々に指示したその米は、他の村の人が持って行くために積んで置いた米だったのです。そんな事は知らないシネリニコフ中尉に「これを積み込め」と命令され、薬取の船に積んで来たのです。

他の村の人々は自分たちの米を横取りされた恰好になって「薬取の奴らはずるい」と不評を買ったようですが、薬取の人にとっては「シネリニコフ中尉は大した人だ。薬取のために優先的に米を回してくれた」と非常に人望が高かったです。

ですが、私はシネリニコフ中尉が大嫌いでした。それは家宅搜索の度に我が家に来て、他から出張して来た連絡将校の土産として、我が家の物を持たせてやったり、そのようなこともあって嫌いでした。

そして終戦の翌年昭和21年（1946年）1月にソ連の民間人が入ってきて、ソ連漁業コンビナートという漁業の加工場を作るということでした。この時初めて「民間人が入って来たことは、この島はソ連に捕らわれたのではないか」という思いがしました。

それと同時に、2月頃になって急に「16才以上の日本人男女は全て身分証明書を持たなければいけない」として身分証明書を持たされました。大きさはA4版の半分で写真入り、ソビエトの刻印が押ししており、非常に立派なものでした。これを4月に交付されました。これを持っていないければ、お前は闖入者と見なされスパイ容疑で連れて行かれても仕方がないという状態となりました。16才以上の人は全員持たされました。

5月頃になり国境警備隊が交代になりました。今までのシネリニコフ中尉の守備隊が国境警備隊に代わったのです。国境警備隊は兵隊の年齢も高く、独ソ戦線で戦って来た人達で、皆体のあちこちに弾の傷がある、装備も違う隊長もカルピンコという少佐です。家族持ちです。何人かの将校も家族をもっています。将校たちの宿舎は兵舎ではなく、日本人宅の部屋数の多い家の一室を提供して、同居しました。

我々の生活はどうであったかと申しますと、島では冬は燃料が必要です。燃料は天然のガンビ（白樺）や柳（猫柳）でほとんどガンビですが、これを我々が山から刈り出して薪材にして警備隊や漁業コンビナート宿舎などに供給します。春先になりますと漁業が始まります。彼らは本国でも非常に食料がひっ迫していました。ですから日本人に魚を獲らせようとして使役に使うのです。

流水が去ってやっと海が開けたのを見計らって鱈漁を始めるのです。鱈漁を始めるにしても、この時期は餌にする魚がありません。鱈漁は普通延縄漁と言って一本の親縄に小針を沢山付けて海に伸ばし、食いついた鱈を揚げるのです。ところが餌が無いものですから、テンテンというルーアー（擬餌）を自分で造って、沖へ出て50m海底に垂らし、シャクリながら釣り上げるのです。

ノルマは1人1日40本以上です。一本の長さは1m以上ありますから毎日これを40本以上獲るのですが、海の中というのはうまくいかない時もある獲れない日もあり、獲れる時はそれ以上の収穫の日もあります。6～7月になりますと鱈漁や鮭漁の準備をしなければなりません。こうして休み無く四六時中こき使われ放しの状態でした。

ソ連軍人の奥さんや民間人の女性などは、日本女性の衣類とか着物の柄が彼女たちの文化に無いものなので非常に欲しがりました。

薬取は戦災を受けていませんから、各家庭では皆さん着物を持っておられる。ただし、ロシア人は着た切り雀の状態で島に来ますから、何も持っていない。ところが彼らは砂糖・バターなど

を持っています。潤沢ではないのですが持っています。これで日本人のハンカチとか衣類に交換するのです。これを一番最初に始めるのは向こうの奥さん達です。

非常に気さくに話しかけてきます。例えば、小さなコップに砂糖を僅かに入れてきて、母にこれとハンカチにする赤い布が無い？という事から交流が始まるのです。男は意外と「この野郎」と言わんばかりの態度で見えていますから、なかなか交流がうまく始まりませんが、女性は向こうから話し掛けられるとこちらも優しく受け応えするので、日本女性は非常に付き合い易かったのではないかと思います。ですから、あちこちでも仲良くこの様な交流が続いたと思います。

何処へ行ってもロシアの女性は気さくで、アメリカなどの女性に比べて非常に付き合い易いと思います。皆さんもこれから四島交流で島に行かれる場合は、是非こちらから言葉をかければ優しく応えてくれると思います。

むしろ言葉など要らないです。声をかけて、何か物を持って行けば彼女たちはちゃんと受け応えてくれると思います。薬取の女性たちも、何のかの云ってもロシア人女性たちが村に入ってきて、引揚げ命令が出た1947年8月末まで、お互い仲良く生活して来ました。

昭和22年(1947年)8月30日に引揚げ命令が出て、村民の半数が強制送還で日本に送られることになりました。何故半数かと言いますと、当時ソ連漁業コンビナートには島で魚を獲る技術者がおらず、如何しても日本人に残って貰わなければ魚を獲ることが出来なかった事情があって、半数の有能な村民を残したのです。余り働き甲斐の無い村民を先に日本に返してしまうという意図が見えました。

昭和22年9月、択捉島民の約半数が強制送還で樺太の真岡港に送られて、一旦、収容所に入れられたのち真岡港から日本の引揚げ船で函館港に上陸しました。函館に上陸しても、国内は敗戦のためガタガタでしたから大変な状態の中に抛り込まれました。

この強制送還される中で我々が一番悔しいと思った事は、まず一旦薬取のトツカリモイという漁港から小さな発動機船3隻で曾木谷という20kmほど離れた漁港に移動させられました。我々が船に乗って岸を離れますと、それまで海岸をウロウロしていた飼犬達のうち一頭がやにわに海に飛び込むと、他の犬も一斉に飛び込んで夢中になって追いかけてくるのです。機関士は意地悪するわけではありませんが、船のスピードを上げると必死に追いかけてくるのです。そうして我々の顔を見ながら「僕も連れて行って」と目で訴えるのです。

我々は故郷を追われる無念と、悔しさ、をじっと堪えているのです。それを訴える相手はいないのです。見送りの人も余りいないのです。この時期は非常に鱒が大豊漁で、連日の作業でクタクタの状態でした。残った半数の人達も、皆漁場で休み無く作業をしなければならず、見送る人も極々僅かでした。

この状況のなかで、船は遠のいて行く、犬は必死になって何処までもついてくる、みんな必死に悔しさと悲しみを何も云えずに堪えている、犬は追って来る、「帰りなさい」「帰れ、帰れ」という叫び声が、ワーンという大きな鳴き声になって異常な雰囲気となりました。その時は悔しくて涙がでました。みんな大泣きして来ました。犬たちは、沖合いに出ると揃って岸へ戻って行きました。

もう一つの悔しい事は、樺太の真岡港に上陸した時、強制収容所まで2~3kmありますが、この間を我々が数珠つなぎのようになって、ぞろぞろと歩かされるのです。既にその頃は、真岡の町には殆ど日本人はいなくてソ連の軍人や民間人がジロジロと見るのです。その時、戦争に負けるといふ事はこんな惨めなこんな悔しい思いをするのか、と思ってボロボロと涙が止めどもなく流れました。戦争に負けた事が本当に悔しかった。

もう1つ、女性にとって耐えられないのはトイレです。真岡のトイレは収容所から50m程離れたところにあります。独立した小屋です。仕切りというものが全くありません。広いヤードに床板を布いて間を開けてあり、これに跨がってするのです。電気が煌々と点いているのです。時と場合によっては、番兵のソ連兵が立っているのです。男女の区別はありません。こう云う所で用を足さなければならない事は人間として本当に屈辱でした。ところが彼らは平気らしいのです。こんな文化なのか、ロシアという国はもっと高級なレベルとっていたのですが、意外とそういう所は平気だったのです。船の中も同様でしたから、女性は非常に辛い思いをなさったと思います。

それに収容所の食べ物が悪く、皆さん下痢をしましたからトイレ通いも頻繁で子ども、特にお年寄りは大変な思いをしたと思います。この様な思いをしながら9月20日、薬取を経て20日間ぐらいで、そこを抜けて来ました。ですから当時としてはかなりスピーディーでした。

ところが、船が函館港に着くと赤痢が発生したとして上陸が「待った」になりました。他のポロ船に乗り換えさせられて10日間止め置かれましたが、既に日本の国に来ているので、船内は不満が募って爆発しそうになって、あわや如何かなるのではないかと、暴動が起きるのではないかと、いう所まで来て、やっと上陸が許されました。

私は10月3日に秋田県に行きました。終戦～ソ連進駐～強制送還と1年半は辛い思いをしましたが、この辛い中にも結構彼らとの交流に親しいものがありまして、国の施策が如何であろうとも人間同士と云うものは、長い付き合いの間には必ず心と心の交流があると思いますし、私はそれを信じております。

例えば、家にはソ連の軍医が下宿していました。彼とは非常に親しくなりましたが相手は軍人ですから色々な事がありました。

また、私の家は商売をしており、隅々店舗を漁業コンビナートに貸したところ、火災で焼失し私に放火の嫌疑がかかって裁判となり、天寧という150km離れたところまでスキーで行きました。ですがそこで3日目位の時に、裁判官の奥さんがぼったり出て来て、彼女と色々な話をしたとき、母親の考え方というものは日本もロシアも同じなんだという事が初めて判ったり、いろんな体験をして参りました。

何れに致しましても、我々の故郷は北方領土の彼方にあります。私たちは択捉島出身者は択捉島へ、国後島出身者は国後島へ、色丹島出身者は色丹島へ、歯舞群島の人達は、多楽島、志発島、勇留島、秋勇留島、水晶島など各島出身の人達が夫々自分が生まれた島に帰りたいたいという気持ちで一杯です。その願いを悲願として今まで頑張っているのです。

今日皆様の北方領土返還要求に対する熱い思いを頂きまして、我々も四島返還に向けて率先して頑張りますので、宜しくお願い致します。

本日は本当に有難うございました。

択捉島元島民 山本忠平さん

みなさんこんにちは。私は札幌に本部がある、千島歯舞諸島居住者連盟に所属の語り部、山本忠平です。先ほど歳のことを聞かれましたが、82歳です。昭和10年生まれです。

本日は皆さんお忙しい中、おいで下さりありがとうございます。ここ福島県におきましては、先の東日本大震災によって皆さんとても恐ろしい思い、そして苦しい思いをなされて、大変なご苦労をなさっております。遅ればせながら、この場をお借りしてお見舞い申し上げます。

そして、このようにお集まりくださいましたこと、みなさんの北方領土問題にかける強い熱意に心から敬意を表し、感謝致します。

さて、まもなく8月15日の終戦記念日がきます。戦後72年、北海道には今もって自由に行くことも、住むこともできない地域があります。ご存じの北方領土であります。日本固有の領土でありながら、日本人が一人も住んでいないという、不思議な地域です。そしてそこに私が生まれ育った故郷、択捉島薬取があります。今からその72年前の故郷、北海道択捉島薬取のお話をいたします。

私が生まれ育った択捉島の薬取は、ここ「いわき市」からは、地図の上の直線距離で約1,150kmも北東に離れている、とても寒い北国です。1,150kmと云いますと、西の方へ行きますと長崎県になります。

この択捉島は、北海道本島の世界遺産である知床半島に勝るとも劣らない、雄大にして美しい姿形をしていて、しかも海岸付近から高山植物が群生していて、まるで全体がアルプスのお花畑のような、学術的にもとても貴重な「カルデラ火山」であります。

そして、この島で最も豊かなものは、鮭や鱒を主とした漁業資源であります。その豊かさは江戸時代の1800年代に、淡路島の高田屋嘉兵衛が択捉航路を開いてからのち、明治、大正、そして昭和と、145年以上もの間、日本・本州ばかりか中国大陸へも、膨大な海産物を供給しつづけていたことで証明されます。

また、この航路を開いた高田屋嘉兵衛は、択捉島の漁場から大型の「北前船」で大量の海産物輸送を成功させ、巨額の財をなした事でもその規模の大きさがわかります。

もちろんこれは、江戸幕府が択捉島を直接調査し場所を開き、直接管理したのが1800年代という事で、国後島などではそれ以前の数百年にわたり、松前藩の管理のもとで盛んに交易が行われていました。今、現在の北方領土の島々においても、漁業資源はもちろんのこと、鉱物資源が豊かなままで注目を集めております。

さて、当時私の故郷・薬取には電気はなく、夜はランプを使う生活でした。島の交通手段は、夏は主に船で行き来します。陸地は歩くか馬に乗るかですが、熊がでるので危険です。そして、濃い霧・ガスの日が多いのです。天気の良い日、西の山陰に落ちた太陽が真っ赤になって、村の北に開いたオホーツク海の水平線を、東に移動しながら沈みます。しかし、深く沈まないので暗くなりません。午前3時になると鱒漁の発動機船がポンポンと川を下り海へでます。それほど明るい状態が続きます。

12月、1月の冬になると、逆に昼でも薄暗く雪が降り続きます。2月になると、オホーツク海高気圧がはりだし明るくなります。銀世界です。スキーとカンジキが無ければ歩けません。隣村へ行くのも命がけです。馬も役にたちません。目の前の青く広いオホーツク海の海原は、白い大

陸に姿を変えます。時々、流氷がぶつかり合う摩擦音が唸るように響きわたります。明治20年代に、役場、郵便局、学校（明治29年設立）、病院などを建設したのは、私の祖父たち、おじいさんの世代であります。

薬取村を作った功労者の一人である祖父は、昭和になってもこの薬取村に電気を引けなかった事を、いつも残念がっておりました。発電所計画は戦争が始まり、頓挫を余儀なくされたようがあります。その祖父は、終戦の1年前に日本の勝利を信じながら静かに眠り、あの世へ逝きました。81歳でした。

さて、この薬取村の特徴は、住居・家屋の裏に、必ず大きな畑が付属している事です。公共施設にも畑が付いていました。これは長い冬を越すのに、絶対に欠かせない大根などの野菜を自給自足するためのものです。かつて北海道の開拓では、入植者が長い厳しい冬にビタミンC不足の壊血病にかかり、大勢の人が死にました。そうならないための畑です。

薬取では、魚などは川や海で子どもでも獲れるほどウヨウヨしていますから、村の人たちは自分で野菜を作れば、魚と野菜は買う必要がなくなります。お米と味噌・醤油だけ買えば、長く厳しい孤立した北国の冬を越せます。冬の孤立は12月から4月まで続きます。ですからどの家にも、室という地下室があってジャガイモなど自分が作った野菜を貯蔵できる仕組みにもなっています。祖父たちの知恵で、お金の掛からない安心な暮らしが出来る村が造られていたのであります。

また、ここ薬取には近藤重蔵が1798年に建てたという「大日本恵登呂布」の標柱がありました。さらに、その近くには峻険な岩壁から直接海に落ちる、高さが200メートルもあるという、ラッキベツの滝があります。これらは霧深い択捉海峡の名所です。現在はこの地域で、ロシアが特殊金属の「レアメタル」を含む鉱石を採取しているそうです。この択捉海峡のラッキベツへの陸路はありません。船でしか行けないところです。

この日本列島の最も東の端にある薬取村で、私たち子どもは寒いとも思わず、電気がなく不自由だと思いません、野山をかけずり回っておりました。

さて私が国民学校一年生の時、昭和16年1941年12月8日に戦争が始まりました。この日、日本はハワイの真珠湾を奇襲攻撃して、米国、英国に宣戦を布告しました。こうして大東亜戦争が始まりました。このハワイの真珠湾を攻撃した我が日本の太平洋連合艦隊は、霧深い択捉島の単冠湾に密かに集結し、ハワイに向けて出撃しました。勿論、このことは軍事機密ですから、当時は知るよしもありません。戦争が始まった当初は、軍艦マーチも勇ましく大本営は勝利を告げておりました。

しかし、2年後の昭和18年5月29日に、アリューシャン列島のアッツ島で、日本軍が玉砕しました。択捉島はアッツ島がすぐ近い所にあるので、非常事態の臨戦態勢がひかれ、日本軍守備隊によるエトロフ島の守りが強化されます。と同時に、私たち島の定住者の移動は禁止されました。

薬取の、鯨を処理する捕鯨場が在ったポロサンに駐屯した守備隊の兵隊さんたちは、塹壕堀や奥地への秘密道路の工事などをしておりました。私たち学童も勤労奉仕に行き、ポロサンの兵舎に近い笹藪をたがやし、兵隊さんのための馬鈴薯を作りました。また、その砂浜で海水から塩を作る作業を手伝いました。そしてまた、ときには、敵の上陸にそなえての訓練もしました。

一方、水平線を眺めると、そこには北東に向かって進む、勇ましい日本の暁部隊の輸送船団が見えます。ところが、海の中には敵アメリカの潜水艦が潜んでいて、輸送船は頻繁に沈められるようになってきました。

こうなると、春が来ても薬取に生活物資を積んだ松山丸という定期便船がやって来ません。船も人も、日本の軍隊に徴用されてしまったのです。島の漁場へ出稼ぎに来る人はいなくなり、夏

になっても漁場が開けなくなってしまいました。村は、定住者だけの寂しい町になりました。私たちは、兵隊さんと一緒になって島の守りについていたのであります。玉砕を覚悟で、最後の一人まで戦わねばならない事態に置かれていたのであります。

戦況が緊迫した中であっても、島の子どもたちはよく遊びました。学校のすぐ下に神社があって、その神社の周りに野いちごが沢山ありました。神社には高田屋嘉兵衛が祀られていて、小さい時からその名を自然に覚えてしまいます。しかし、何よりも子供達は、神社と云えば野イチゴでした。学校の授業の休み時間に教室から駆けだし、それを摘んできておやつ代わりにします。

野生の果実をフレップといいます。夏から秋にかけて、さまざまなフレップが近くの山の斜面に生え、実が熟します。とても珍しい高山植物の「Berry」すなわち、「ブルーベリー」や「レッドベリー」のたぐいです。野山のベリーが島の果物です。特に、海岸から延びた日当たりの良い山の斜面には、このフレップが群生しています。これを摘んで浜において、海水浴をしながら食べます。海水浴といっても、海も川も冷たいのであまり泳ぐことはなく、浅瀬で鰈の子や鱒の子など小魚をすくったりして遊び、体が冷えると温かい砂の上に寝転び体を温めます。

男の子は冒険好きですから、遠くへ出かけます。遠くといっても1kmか2km程度です。それでも熊が出るので歌を唱ったり、缶を叩いたりしながら行動します。草や木がカサッと鳴ると、一目散に逃げます。必死で走るの、みんな足だけは速くなります。なにせ熊も甘いフレップが大好物なので、私たちとかち合わせになってしまいます。

薬取の浜に敵の米英は現れることなく、空襲される事もなく昭和20年8月15日、戦争が終わりました。終戦です。このとき私は5年生で10才でした。「武装解除し、現場に止まり、指示を待て」と言うような命令を最後に、国からあるいは軍隊からの対応策は途絶えてしまったのです。

そして、その後暫くして択捉島にやって来たのは、対戦相手の敵アメリカ軍ではなく、ソ連軍でした。いつの間にか、戦争に勝った国のお偉方が勝手に引いた「分割線」に「鉄のカーテン」がおりて、私達は島に閉じ込められたのであります。通信は遮断され、海を渡ろうとしたものは射殺されました。

ソ連軍の択捉島への最初の上陸地は、留別と言う村でした。留別への上陸日は8月28日と記録されています。薬取には、留別上陸から更に遅れて9月の末頃に進駐して来ました。日には覚えていませんが、どんよりと曇った冷たい日でした。この日は外へ出ないようにと伝達があり、学校は休みになりました。

道路側の窓にはカーテンを降ろして、その隙間からロシア兵が来るのを、今か今かと覗いていました。樺太の国境線などでのソ連軍の猛烈な進撃の様子を伝え聞いていたので、銃撃される恐れに怯えながらも怖いもの見たさが先に立っていました。しかし、足音の気配が迫ってきた時にはやはり怖くなり、カーテンをぴったりと降ろして、うずくまって足音が通り過ぎるのを待ちました。

翌朝、この日もどんよりした冷たい霧の日でした。家を出て学校に向かう道すがら、霧の中から銃を構えた二人のロシア兵が現れました。冬用の丸い帽子を深々とかぶり、裾の長いオーバーを着ていました。顔がまるで猿のように赤く見えました。この時、生まれて初めて外国人を見たのであります。

この日から、上級政治将校による家宅捜査が頻繁に行われました。土足のまま上がり込んでくるので、どの家でも気丈なお母さんたちが、将校にむかって靴を脱げと抵抗します。土足で畳の上を歩かれるなんて事は、きれい好きな日本の母親達にはとうてい許せません。しかし、彼らは脱ぎません。

銃を構えた兵士は、お母さん達を実力行使で押しつけて、上級政治将校の臨検を助けます。上級政治将校は棚、押し入れ、タンス、戸棚、行李など全てを開けさせ、そして気に入ったものがあると奪っていきます。何度でも来ます。

ただ、ソ連軍も東の端シベトロ進駐時には、上陸してから20日ほど過ぎていたせいか、かなり冷静になっていたらしく、留別村や天寧村で発生したような人命に関わる銃撃や乱暴な行為は起こりませんでした。そして何よりも、当面日本人はそのまま自分の家に住んで良いと云うことがわかって、命の危険が去りまずは一安心しホッとしたものです。

村では、ソ連軍が来る前に汚されるのを恐れて、私たち生徒は先生の指示で学校の御真影奉安殿を解体しました。そして、御真影や教育勅語を恐る恐る燃やして、その灰を缶に入れ、学校の土手に深く埋めてしまいました。大人たちは神社を解体したと記憶しています。その際、そこにあった大きな忠魂碑はそのまま残したように思います。

また、武装解除した日本の兵隊さんは、一部の人が部隊を離れて、村の住人として村の空いている家に住んだり、手に職を持った兵隊さんは男手がない家庭に同居して身を潜めました。若い女性は髪を切り、坊主頭にして顔を黒っぽく汚し男の格好をしました。郵便局は、電信電話など通信機器は撤去し、木工の工作所にして兵隊さんだった大工さんたちが仕事をしていました。それらの事が、ソ連兵の日本人に対する恐怖心を少し和らげたようでした。

この最初に入ってきたソ連「赤軍」のことを、帽子の帯が赤かったので、私達は「赤帽」と呼びました。赤帽隊の一部は、暫くして家宅捜査や日本人の調査を終えると、まず上級政治将校が去りその後ソ連兵は村にいた元日本兵を捕虜にし、連行して行きました。ただ、手に職を持った数人の兵隊さんは残されました。

私の家にも三人の兵隊さんが家族として同居しましたが、結局は石川県金沢出身の衛生兵だった一人が、村のお医者さんとして残り、宮城県仙台出身の二人は隊に戻され捕虜となりました。

10月末か11月に入ったある日、雪がちらつく寒い中、日本の兵隊さんたちは、銃を構えたソ連兵に囲まれて、徒歩で町を出て行きました。戦争は終わったのに、捕虜として遠いシベリアに連行されて行く姿は哀れです。私達は、自分の家の目の前で見送る事を許されたので、兵隊さんの名を呼びながら、手を振り別れを告げました。

連行された中には、薬取村警察署のただ一人の若い警察官がおりました。この巡査が赴任したのは一年前です。結婚したばかりで、妻と赤ちゃんを北海道本島に残しての単身赴任でした。

ところが、奥さんは赤ちゃんを抱いて、戦況悪化で船便が途切れる中、苦勞して薬取にやってきたのです。その数ヶ月後に終戦になり、ソ連軍がやってきて、夫は警察官と云うだけでシベリアへ連行されたのです。全く不運というしかありません。奥さんはその後、精神状態が不安定になりました。奥さんと赤ちゃんは、住居だった警察署から追い出され、倉庫のような所に移され、他の家族と共同生活することになりました。その後どうなったのか分かりません。

12月に入ると雪が降り続き、外部との往来は出来なくなります。その冬、薬取村の監視と警備に残ったのは、大尉を長とした一隊でした。川のそばの洋風邸宅は、赤軍の司令部になりました。大尉と副官は、当番兵を連れて私の家の前の空き家だった旅館を占拠しました。雪が降っても雪かきをしないので、玄関は塞がり、直接2階の窓から出入りするありさまです。

その当番兵は17歳の少年兵でした。赤帽の兵隊達は少年が多く、恐がりですぐに自動小銃をぶっ放します。この当番兵は、あれが無いこれが無いと言って、たびたび私の家にせびりに来ました。まもなく、すっかり仲良くなり、玄関先に座り込んだ彼にいつも担いでいる自動小銃を見せてくれと頼むと、躊躇せず嬉しそうに銃を分解して見せてくれました。

その冬は日本人もソ連兵も、雪と氷に閉ざされて孤立した村で、それぞれが蓄えていた少ない食料を小出しにしながら凌ぎ、ただじっと耐え春を待ちました。

学校には若いソ連兵の一人が、私達にロシア語を教えに来ました。日本語は一言も話せない青年でした。お昼に先生が、茹でた馬鈴薯を出すと、おいしいと云ってにっこり笑いました。私たちは馬鈴薯を食べるロシア人青年を見て、親しみを覚え笑いを返しました。教室の高い所の壁には、レーニンとスターリンの肖像画が掲げられました。

ソビエト社会主義共和国の憲法の時間もありました。誰が、何時何処でそんな物を作ったのか、ガリ版刷りのテキストを読みながら、ソ連に協力している日本人がいるのだとわかり、みんな警戒心を強めました。

さて、終戦の翌年、海の氷がさり、山の雪がとけて春になると、今度は青い帽子をかぶった「青帽」の国境警備隊がやってきました。

今度は少佐が隊長の大部隊です。少佐の事をマヨールといいます。ソ連兵は全員が常にピストルを腰に付けています。この少佐・マヨールのピストルのホルダーは、膝まであるばかりでかい物でした。そしてこのマヨール婦人は、髪の毛が黒く体もあまり大きくなく東洋的で、とても風変わりな女性でした。

驚いた事に彼女は自分達一家のミルク用に、乳牛を一頭連れてきました。薬取には牛はおりませんでした。初めて牛を見たのです。また、このマヨールには髪の毛が黒い少年の息子が一人いました。このマヨールの息子が、ソ連側の子どもたちのガキ大将になって、後に再び私たちと対決する事になります。

この青帽の国境警備隊と交代に、赤軍の「赤帽」隊は、村から去りました。国境警備隊に続いて、労働者がやってきました。女性たちは、まだ寒いのにコートの下は、薄着の夏姿でした。靴底はすり減り穴が開いています。大勢がやってきたので、私たちが住んでいる家の部屋半分をとられました。そこにソ連の将校が入りました。将校の多くは所帯持ちで、子供もいます。どの家も、言葉の通じない同居人に困りはてました。パニックの連続です。ソ連の労働者は、空き家に数所帯が押し込められて、窮屈な共同生活をしいられ、軍人達に比べると、とてもひどい扱いです。

日本人にも、身分証明パスポートが発行されました。これがないと外を歩く事が許されません。適用はたしか17歳以上で、17歳以上は「働かざる者食うべからず」というソ連の規律にならない、日本人もソ連の労働者と一緒に働かされました。

この占領は連合軍ではなく、ソ連の単独の占領で一方的に素早くソビエト連邦の法律が実施され、日本人は否応なくこれに従うことになったのであります。島は島民もろとも、ソビエトに取り込まれてしまいました。ソビエトは、私有財産を認めない国ですから私物、個人のものという概念はありません。すべてが社会のもの、即ち国家のものです。

日本人住民は蓄積した財産全てが奪われ、捕虜の扱いにはならなかったのですが、自宅に収容された罪人とでも云えばいいのか、行動の自由も言論の自由もありません。川の魚もとれません、自分の畑にも入れません。ですから、用事で隣へ行くのにも、知り合いと会話をするのにも許可がありません。そして、法律違反をじっとどこかで見ている恐ろしい秘密警察がいます。それが誰なのかは秘密です。

学校も半分がソ連の子どもたちの教室になりました。休み時間には、それぞれの出入り口から、わーとグラウンドに飛び出しもみ合います。分けもなく、お互いがぶつかり合います。憎み合っているわけではありません。お互いささやかな自己主張をしておりました。私たち日本の子どもは、

禁止令など無視して外を歩き回っておりました。町中では、ロシアの子どもと仲良く振る舞っていますが、川向こうに行き、大人たちの見えないところで、集団で喧嘩をします。

あの少佐の息子はピストルを持っていました。彼は負けそうになると、ピストルをむけます。彼はまた、いつも軍用のシェパード犬を連れていきます。こちらにも大将がいて、集団対抗の時は、小石やパチンコなどを隠し持ち、押し合いへし合いの喧嘩をします。決して負けません。

これはなにか、私たち日本人はソ連に負けたという意識はなく、ソ連を解放軍として歓迎もせず、敵視したため、お互いの誇りや意地がぶつかり合いをしていたのだと思います。

大人達は、毎日もっと惨めな思いをしていたと思います。占領2年目ともなると、蓄えていた食料もなくなり、物々交換できる物もなくなってきます。どんなに悔しくとも、耐え難きを耐えて忍び難きを忍び家族の命を守りながら、祖国日本からのなんらかの指示を待つしかありません。

「武装解除して現場にとどまれ」という指示のあとに、2年がきても情報は何も伝わってこないのです。日本の政府から誰一人来ないのです。どうしたらいいのか分からないのです。島にいた日本兵捕虜は、みんなシベリアへ送られてしまいました。シベリアはロシア人にとっても絶望の地であり、常にシベリアの恐怖に怯えながら大人しく働いています。また、ロシア人はロシア人同士の密告を恐れて、お互いを信用しません。ただ黙々と働きます。

私達にとって一番の驚きは、彼ら労働者は着の身着のままであった事です。袋一つかついで移動します。それが財産です。小さなバケツ一つで、鍋釜の用から洗濯、排泄までこなします。そしてまた、大陸からきた彼らは北の海を知りません。漁業も知りません、魚の食べ方も知りません。全て、日本人に頼らなければならない状態でした。

軍人はまだましですが、一般の労働者は本当に何も持っていません。しかし強いのです。日本人は、その耐久力にはとてもかないません。とにかく彼らが来てから、外に置いたもの、家の中に置いてあるもの何でもなくなるのです。洗濯物も外に干せません。特に、日本の女性の赤い腰巻きを物干し場に干していると、兵隊が敬礼をして取って行きます。ソ連の旗・国旗と同じ紅色だからなのです。

私たち日本人の家には鍵などはありませんでした。玄関は開けっ放しでしたから出入り自由でした。彼らは取られる方が悪いのだといいます。

そもそも、他人の物を取る事に罪悪感がありません。大切な物は取られないように自分で守ることが大事で、取られる方が馬鹿なのです。ソ連の人たち個人個人は、実にお人好しで良い人間なのですが、自分の物と他人の物の区別がありませんから、人の手を離れた物があれば素早く持ち去ります。但し、国家の物には無断で手を付けただけでも重罪になり、捕らえられます。シベリア送りです。

終戦から2年過ぎた1947年、昭和22年の夏頃、日本人は日本本国に送還される事になって、残りたい人はロシアの「国籍」を取るようにと云われました。私達は、ロシア人になってまで故郷に残る事よりも、どうせ死ぬなら日本人として日本で死のうという思いで一杯でした。そして全員がソ連国籍を拒否しました。

私たちは我が家から、我が故郷から、理不尽な選択を迫られ追い出されたのであります。

理不尽は続きます。私たちに許された持ち物は一人15kg程度でした。持てるのは、当面の衣服と食料と鍋代わりの飯盒ぐらいの物です。日記とか写真とかは持つことは許されません。何もかも全て消去されてしまったのです。

まさに、何の因果か着の身着のままやって来たソ連の労働者たちに同情していた私たちが、皮肉なことに今度は入れ替わって、着の身着のまま強制移動させられるはめになったのです。

私たちが町から少し離れたトッカリモイの港から、発動機船に乗って薬取を離れる時、軍人、労働者、子どもたちまでが別れを惜しみ、バラバラに大勢が見送りに来ました。驚きました。本当は規則違反で、来てはいけないのです。それを破って見送りに来てくれました。中には、行かないでくれと泣きながら抱きつき、離れない人もおりました。故郷を離れ見知らぬ所に行く事の悲惨さを彼らロシア人はよく知っていたのです。日本人に「帰るな、帰るな」と盛んに言うておりました。

私たちは同じ屋根の下で暮らし、いつの間にかみんな家族のようになっていたようです。

さて、私たち択捉島の日本人は、ソ連の貨物船に貨物同様の扱いで畚（もっこ）に積まれて、ウインチ（巻き上げ機）で吊り上げられて、暗く深い船倉（ダンブル）に押し込まれました。これはまるで、奴隷船のようでした。ロシア人にとっては普通の事のようにでしたが、お年寄りや小さな子どもには、衝撃的な恐怖だったと思います。動きまわると、深い船底に落ちてしまいます。出入りは垂直な細い鉄はしごだけです。

貨物船は、薬取の次は紗那や留別などに寄港し、日本人を積み込んでから国後沖を通り、知床半島の海岸を間近に見ながら北上し、宗谷海峡を通り更に北上し、樺太の真岡という大きな港につきました。私たちはここで降ろされました。

この樺太では終戦直前の8月9日に、中立条約を破棄したソ連軍が攻めてきて、激戦となったところです。真岡も8月20日に攻撃を受け、日本人の集団自決までありました。ソ連の攻撃は8月25日まで続いたと聞きます。

初めて見る樺太の真岡は、大型船が接岸できる港湾都市でした。ところが道路はぬかるみの泥んこ道、靴を取られ重いリュックサックは肩に食い込み、なかなか前に進めません。必死で歩き、小高い山の上の収容所に辿り着きました。日本の女学校があった所だと云います。本当に日本に向かっているのか、やはりシベリアに連れて行かれるのかと不安は増すばかりです。

収容所の周りは金網で囲まれ、ソ連兵が銃を構えて嚴重な見張りをしていました。金網の外には、戦闘で親とはぐれて浮浪児になった子供がへばりついて中を覗いていました。日本人の子供であることを証明してくれる肉親を探しているのです。証明されない子供は二度と日本には帰れません。

薬取から真岡までの貨物船での一週間は、水すら貰えなかったのですが、真岡の収容所では黒パンとスープが支給されました。しかし、豆とキャベツの水みtainなスープは、私達の口に合わず、みんなひどい下痢をしました。集団中毒です。共同便所は遠く離れていて、収容所から坂を登って行かなければなりません。下痢をしたお年寄りや小さい子どもは、我慢できずに漏らすしかありません。

この便所は、長い板を一枚外しただけの恐ろしい便所で、足を踏み外すと落ちてしまいます。おまけに男女共用で、オープン形式ですからお尻は丸見えです。

とても想像できないでしょうが、この建物は客車のように長く、真ん中が通路で両サイドに細長い深い穴があるのです。この穴にしゃがみ、用を足します。混んでいる時は、一つの細長い穴を、向かい合わせか、後ろ向きになって二人で使います。ここには、赤ちゃんが複数落ちたままだと聞きました。ここへ着いた時には死んでいたのでしょうか。泣かない赤ちゃんを抱いたまま離さないお母さんもおりました。お母さんは食べるものがないのでおっぱいが出ません。

また、ここにパスポートを落とした人は、体に付けたロープを何人かの人に支えてもらい、便壺に降りてうんこまみれでパスポートを拾い上げました。パスポートがなければ、帰国できません。ソ連ではパスポートは命よりも大切なものなのです。

何日かしてようやく、「徳寿丸」という日本の引き揚げ船が接岸した岸壁に連れて行かれました。まさしく日本の船でした。日本はちゃんと存在していたのです。船のタラップを上ると、赤十字が入った白い帽子の看護婦さんが迎えてくれました。お帰りなさい、ご苦労様と声をかけられました。日本語の言葉、その声を聞いた時夢のようでした。胸がいっぱいになりました。生きた心地がしました。どんなに嬉しかったか今でも忘れられません。それでも私達は、まだ恐怖に怯えていて、連れ戻されるのを恐れて、船の下へ下へと入り、船員に遮られる有様でした。

船が岸壁を離れてから食事が出ました。炊き込みご飯でした。私達は何度も何度も自分をつねり、隣の人をつねり、痛さを実感し合い、顔を見合わせ笑いました。夢ではなかったのです。

ただ、引揚げでは残念なことがありました。全員が一度に一緒に島を離れられなかったことです。半数近くの人が残されました。翌23年に送還されましたが、ロシア人ばかりの中での一年は、食べるものは黒パンになり、住むところも移動させられ、口では言い表せない気が狂いそうな辛い1年だったと聞きました。そしてまた、残された人たちの中の一人がソ連の秘密警察に連行され、ピストルを頭に突きつけられる取り調べの後、シベリアに送られました。

みんなを煽動して、お盆に休んだとか海が荒れている日に発動機船を出さなかったとかが、ソ連に対する重大な反動行為だとされ裁かれたのです。数年後、その人の親戚の元へ、引揚港の京都府舞鶴病院から連絡が入り、彼を迎えに行ったのですが、嘗ては屈強な男だった彼の姿はなく、肉体的にも精神的にもボロボロになった、そして親戚をすら認識できないまでになった、変わり果てた男がそこにいたと聞きました。北海道に連れて帰りましたが、回復することなく病院で亡くなったと聞きました。彼にも妻と女の子がいましたが、二人は引揚げ後まもなく、混乱の日本に生活の場を見いだせず、二人とも亡くなっていて迎えに行けなかったのです。

函館に上陸した着の身着のままの私たちは、引揚者という名の難民でした。今まで助け合って生きていた村の人達が、函館からバラバラに散って行ったのであります。それは、さらなる苦難の始まりでした。

それから後、薬取を出てからおよそ48年が過ぎた1990年、ようやく故郷薬取のお墓参りの「墓参」が出来るようになりました。そして、故郷薬取に戻って、私が見たものは荒れ果てた原野でした。薬取村は消えていました。

日本人が去った後に、此処で何かが起こったようです。ここに、ソビエトの国境警備隊と労働者が大勢やってきましたが、冬を越す燃料に事欠き、手当たり次第に樹木を切っていました。洪水が起こったかもしれません。地震と津波があったかもしれません。

周囲にはスズメも、カラスも、虫も、蠅すらもないのです。ただやはり、川には鮭が帰ってきていて、上流めざし波を立てて上っていました。川尻には少ないながらカモメが並んでいました。故郷の懐かしい面影にほかなりません。

村の中央に、ぽつんと国境警備隊の質素な兵舎があり、その横にかろうじてお寺の松の木が、薪にされずに、2、3本残っていました。非番の若い兵士たちが、貴方達の水だ、といいながらコップの水を差しだしてくれました。村の井戸水の水源は、途切れることなく湧き出っていて、彼らもそれを飲んでいたのでした。

私たちはお墓に向かって歩きました。足は自然に動き、焼き場と墓地があった近くで慰霊祭をとりおこないました。

先祖のお墓の墓石は墓地にはなく、墓地の下の畑だったところに、無造作に転げ落ちていました。これは困ります。本当に行ける時に行って、せめて先祖の墓ぐらいは元に戻してやりたいものです。墓まで壊して、日本人の足跡を消そうとしたのでしょうか。人間のする事でしょうか。

これはクレムリンの、スターリン体制によるものかもしれませんが、人間として決して許されることではありません。

いずれにしましても、43年目とはいえ、ようやくにして故郷の墓参が可能になったことは大きな前進です。そして、ふたたび故郷に帰れたことは大きな喜びです。ただ、残念なことはあまりにも長い年月がたち、待ちわびながら故郷へ戻って来られなかった人達の方が多いのであります。私の同級生は5人おりましたが、この故郷薬取での再会は、誰一人とも果たすことができません。そしてまた、43年前にここで一緒に暮らし、せっかく友達になったロシア人に誰一人とも会えないのです。

さて、ここで現実に戻ります。終戦後72年にもなる今現在、日本とロシアの平和に対する認識の隔たりは、未だに大きいままで。これを乗り越えるには、とても難しいことではありますが、日本人とロシア人がよりお互いを知り合う「相互理解」を深めて、信頼しあう事にあると思います。信頼が友愛に繋がります。しかし簡単ではありません。耐え忍ばなくてはなりません。

そしてまた残念ながら、島のロシア人は最近になってようやく本音で話せるようになったばかりなのです。択捉のある村長さんは、ここは色々な民族の集まりで物事を纏めるのにとっても苦勞するといっていました。ロシアには182の民族がいます。ある年配の女性は、大陸の故郷を懐かしんでいました。子供は大陸の大学で学び、そのまま大陸の都市で生活していて、戻ってこないそうです。国後の知人は、可愛らしい孫娘を連れていました。彼は孫娘を、日本の大学で学ばせたいと云っていました。彼自身とても日本語が上手です。

こうした中、北方領土返還の交渉は半世紀が過ぎても、困難に突き当たったままです。両者ともどちらかと云えば、次の新しい世代の知恵に頼らざるを得ない状況です。

ソビエト社会主義共和国連邦が崩壊した後、ロシア連邦はソビエト連邦時代よりも、更に実効支配を強め日本に圧力をかけてきています。厳しい試練は増すばかりです。

お互いの素朴な平和という願いが叶うように、そこに共有できるもの、例えば地球環境的な真の正義感や地球環境的な真の道德観を見いだせたなら、自ずと道が開けるものと信じます。

ただ、既成観念にとらわれている、私たちの世代では力不足です。それを解決に導くのは、若い力のエネルギーなのであります。新しい大きな、若い皆さんの叡智のエネルギーが必要です。

叡智のエネルギーがあれば、そして日本人の誇りと力の結集が蘇ってくれば、今もって残されている戦後の諸問題は、取り除かれていくものと信じます。

最後に私は、私たちの先人たちが命をかけ、力を尽くして築いたあの自然豊かな島々が、人々が自由に往来できる、平和で美しい島に早く戻って欲しいと願いながら、私の講話を終わります。ご静聴ありがとうございました。

択捉島元島民 安田愛子さん

皆さん、おはようございます。ただいまご紹介を頂きました安田愛子と申します。どうぞ宜しくお願い致します。昨日、北海道・帯広市より初めてこちらに参りました。日本一の富士山を毎日のように眺める事が出来る皆さんは、本当に幸せだと思います。私はとても羨ましく思います。

私は、昭和14年、択捉島薬取村で生まれました。北方領土は、根室の北東に位置しています。大きい島から言いますと、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々が北方領土です。そして北方四島とも呼んでいます。面積は四島で5,003km²で大体千葉県か福岡県と同じくらいです。千葉県は5,157km²あります。

地図にちょっと出たところありますね、これが根室半島です。その先にノサップ岬と書いてありますが、ここには返還要求運動のシンボル像「島の架け橋」があります。また資料館も昨年でき、元島民が引き揚げ時に持ってきた物や船で脱出した時に持ってきた品々が収められています。私の母も引き揚げの時にミシンをバラバラにして、布団の中に隠して持ってきました。それをこちらに来てから随分使いましたが資料館に納めました。

この貝殻島はノサップ岬からわずか、3.7キロしか離れておりません。納沙布岬には望遠鏡がたくさん備え付けてあります。それで見ますと、すぐ目の前に貝殻島が見えます。また、野付半島から国後島までは16キロです。標津に住んでいる私の知っている元島民の方は、「毎日、目の前の国後島を見るのはとても辛い」と私に会うといつも言うんですね。その気持ちは良くわかります。

これから当時の薬取村の事、ソ連軍がいきなり入ってきた事、一緒に生活した事、強制送還で樺太の真岡に連れて行かれた事、真岡から北海道の函館港に帰還した事等を話してから、私の故郷・薬取村を初めて訪問した時の事をお話ししていきたいと思います。

では、当時の薬取村の事です。薬取村は漁業の村です。秋に秋味が捕れる頃になると、本州や北海道から多勢の出稼ぎの人達が村に働きに来ます。村は普段350名足らずの人口ですが、その頃になると1,000人以上にも膨れあがって村は一気に活気づきます。川は棒を立てても倒れない位、川幅いっぱいには鮭が遡上してきます。その鮭の背の上を鼠が走って渡っているのを見たと言う人も居るくらいです。皆さんは判らないかもしれませんが、本当の話です。鮭の漁が終わると、出稼ぎの人達はまた本州や北海道に帰り村は元の静けさに戻ります。

子どもの遊びといえば、男の子も女の子も海や川や山で遊びます。私はよく、「カレイ」を捕った事を思い出します。カレイは海の浅瀬の砂の中に隠れます。砂がこんもり高くなるので、カレイが居る事がわかります。そこを足で踏んで捕まえます。いくらでも捕れました。川は目で見えるほど魚が沢山います。

冬には低学年はカルタや双六、女の子はままごと遊びなどをして遊びました。高学年は、スキーや百人一首などして遊びました。大人の楽しみは、小学校の運動会、学芸会、そして村祭りです。村祭りでは「素人歌舞伎」などもして、村人皆が集まり楽しみました。

薬取村には、日本最大と言われる「ラッキベツの滝」があります。ラッキベツの滝というのは、落差が140mあります。断崖絶壁から海に直漠で流れでています。明治の初め、蝦夷地を「北海道」と名づけた「松浦武四郎」と言う方をご存知かと思います。「武四郎日記」には、那智の滝よりも迫力があって美しいと書かれています。那智の滝は和歌山県にありますが落差133mです。

私は、一度ラッキベツの滝を見たいといつも思っておりましたら、2年前択捉島訪問で茂世路・トシルリに行った時、途中船上からですが遠くにラッキベツの滝を見る事ができ感激しました。

択捉島は全長204キロあります。択捉島では、戦争に関わっている事があります。それは、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃です。択捉島の単冠湾に日本の海軍が集結し停泊地としました。航空母艦6隻、戦艦25隻、戦闘機382機、日本の総力を上げて、海軍機動部隊が静かに単冠湾に集結しました。そして11月26日の朝には、村人が寝静まっている間に音もなく出航したということです。近くに住んでいた村人の話では、湾一面戦闘機で埋めつくされ、夜になるとサーチライトが照らされ、まるで昼のようだったと言っておりました。

真珠湾攻撃で大本営は機動部隊に暗号電文を発信しました。「ニイタカヤマノボレ・ヒトフタ・マルハチ」開戦日は12月8日とする。ヒトフタは12月、マルハチは8日、新高山は台湾にあります。日本では富士山が3,776mで一番高い山ですね。この新高山は3,952mあります。台湾は当時、日本の統治下にありました。新しい日本最高峰という意味で、明治天皇が名付けたと言う事です。現在は、台湾「玉山ユイシャン」と言います。

もう一つ歴史的に大事な事があります。1798年寛政10年8月、幕府は大規模な調査隊を島に派遣しました。近藤重蔵は、最上徳内と共に択捉島に渡り、「大日本恵登呂府」と書いた標柱を丹根崩の丘リコフに建てました。その後、カムイワッカオイにも「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建て、この島が日本の領土である事を示しました。

薬取村は、自然が豊かで平和な村でした。どの島もどの村もそうでした。島を故郷に決めた人達は、明るい希望を持って生活しておりました。

ところが、戦争が終わって昭和20年8月の末、ソ連軍がいきなり村に入って来ました。あちこちの村では、土足で家に入り色々なものを物色し、自分の欲しい物を持って行かれたり、強姦騒ぎがあったり殺された人もいました。兵隊に何か悪さをされるのではないかと、年頃の娘さんは頭を坊主にして男の格好をしたり、家に隠れて外に出なかつたりもしました。私の村では、土足で入れ物色し物を持っていかれた家は沢山ありましたが、殺された人はいませんでした。四島で殺された人は10人程いるということです。

根室に近い島民の中には、ソ連の厳しい監視の目をくぐって島を脱出した人が9,000人程いますが、船で脱出の時時化にあつて船もろとも海に投げ出され、命を落とした人もたくさんいるということです。

ソ連人とは、2年間一緒に生活しました。ソ連人は、空き家、旅館、官舎、それに空いている部屋、大きい家は二つに仕切って片方が日本人もう片方はソ連人が入って生活しました。

私の家も、玄関の横に空いている部屋があつたので、若い将校が一人寝泊まりしていました。私の家族は7人家族で両親と子ども5人です。一番上の姉は、北海道の網走の叔父の家にお世話になって中学校に通っていました。島には小学校しかありませんので、中学校に行きたい人は大体北海道に出て中学校に行きます。

ソ連人が入って来てからの小学校は、ソ連の子どもは体育館、日本の子どもは普通の教室で学びました。ソ連の校長先生が「自分たちは後から来た者だから、体育館でいい」と言ったそうです。ソ連の子ども達と、きっと一緒に遊んだとは思のですが、私はあまり記憶にありません。男の子はよく喧嘩をしたと言っておりました。喧嘩の原因は物の貸し借りで、例えばスキーを貸しても返してもらえなかつたので取っ組み合いの喧嘩をしたそうです。貸しても物が返ってこない。自分の物は自分の物、人の物も自分の物…そんな事が多々あつたそうです。

私の母は、村で一人だけミシンを持っていました。先程、資料館に収めてあると話したミシン

です。そのミシンでソ連の将校の奥さん方のドレスを何枚も作ってあげていました。ソ連の女の方は年をとると、かなり太ってくるんですね。ですからギャザーがたくさんよったドレスを何枚も縫ってあげていました。

ソ連軍が入って来てからは、電線が切られ本土との通信が出来ません。また船の航行が禁止されていたので食料が不足しました。食料を得るために着物、時計、カメラ等と交換しました。ソ連人が時計やカメラを持つことは、彼らにとってステータスシンボルだったようです。

ソ連人の食べ物は「黒パン」です。パンの厚さと同じくらいバターを塗って、その上に砂糖をたっぷりかけて食べていました。パンを作る時は、当時はボールとか鍋類は余り持っていませんので、朝自分が顔を洗った洗面器でパンの生地を捏ねていたのを覚えています。

また兵舎では、パンを焼くのに火葬場からレンガを持ってきて「パン窯」を造ったり、墓石を家の土台にして使っていたと私はずーっと後から聞きました。日本人には考えられない事ですね。文化の違いでしょうか。

私が小学校2年生の昭和22年8月30日に、強制送還、引き揚げの命令が下されました。36時間以内にトッカリモイに集結せよと言う事です。トッカリモイは、村から随分と離れた所で少し入江になっていて、船着場があり番屋がある所です。すぐに父や母は、沢山の写真や書類を家の前の空き地に穴を掘って埋めました。引き揚げの時、紙類の写真や書類を持っているとスパイ行為と見なされて持って帰れなかったんです。ですから、私の家には島の写真は一枚もありません。

でも、紗那の従姉の家では母親が写真を選ぶ間もなく、手掴みで荷物の中に入れたそうです。ソ連の検査官が荷物を何も調べずに「早く行きなさい」と言って通してくれたそうです。そういう優しい検査官もいたようです。ですから従姉は島の写真を少し持っています。

引き揚げの時、村の人達は着の身着のまま少しの着替えや荷物を持って「トッカリモイ」の船着場までみんなで歩きました。そこの番屋で3日程泊まり、船が来るのを待ちました。

船に乗ると決まった時、私の父だけが残るように命令されました。父の仕事は水産孵化場の技師です。孵化技術をソ連人に教えるために残されたそうです。発動機船に乗る時に父と別れました。船に荷物を敷き詰めるように積み、その上に人が乗ります。私達は、村を離れる悔しさ寂しさを背負って村を出たのです。船は次の村「曾木谷」まで行き、曾木谷の倉庫で数日泊まりソ連の引き揚げ船を待ちました。

朝早くから子供達は目が覚め、倉庫の前で遊びます。私の旧姓は「白井」といいます。大人の誰かが「白井さんが来た」と大声で叫ぶ声が聞こえました。私はびっくりして後ろを振り向くと、遠く朝もやの中を父が白い馬に乗って走ってくるのが見えました。倉庫から村の人達が多勢出てきて大騒ぎになりました。父の話ですと、私が村を離れるとき家に寝泊まりしていた将校が、ソ連に出張に行っていないが帰って来たらいつもの家族が居ないので訳を聞かれたそうです。父が訳を話すと、将校が上層部に掛け合ってくれて帰る事を許されました。

父はすぐさま家で飼っていた真っ白い馬のシロに乗って、夜も寝ずに真っ暗い道を走って「曾木谷」に着き、引き揚げ船に間に合いました。

将校のお陰で父と一緒に帰る事が出来ました。本来であれば、将校は敵国の人です。でも家族と一緒に帰れるよう取り計らってくれました。人として、将校の優しい気持ちを今でも忘れる事は出来ません。

曾木谷から、ソ連の貨物船に乗る時、モッコという魚を揚げる時に使う大きな網をつけた道具をモッコと言いますが、それに人間が入れられて吊り上げられ大きな貨物船の船底に下ろされました。深い深い船底です。その中に何百人もの人が寝泊まりしました。甲板に上がるには、細い

梯子を上らなければなりません。子供はトイレに間に合いませんので、大人が桶などを用意してくれて桶が一杯になると細い梯子を上って海に捨てます。大人もトイレが少ないので、間に合わない人は甲板のあちこちで用をたすので匂いがすごく、大波が来ると汚物が飛び散って来る事もあったそうです。

樺太の真岡に着きました。収容所は学校でした。長いなだらかな道を引揚者が列をなして歩きました。随分と遠かったと記憶しております。またトイレの話になりますが、深い深い本当に深い下を見ると真っ暗なような穴だけを掘って、その上に板を渡しただけのトイレがいくつも作ってありました。真岡の土は、雨が降るとツルツル滑ってトイレに行くのがとても嫌でした。いつも姉と一緒に行きました。その深い深いトイレに何人もの子どもが落ちて亡くなったそうです。助ける術はありませんでした。

食事も粗末なものでした。栄養失調になった人、病気になった人が何人もおりましたが、皆亡くなりました。亡くなった人を、トラックに物のようにボンボンと積んでどこかに消え去ったと聞きました。人じゃなくて物という感じですよ。こんな悲しいことありますか。

しばらくして、日本の船の大きな旅客船がきました。真岡を出て函館港に着きましたが、すぐには降りられませんでした。船の中で感染症が流行って、別の古い船に移り10日程過ぎて下船する事になりました。下船する時、消毒用のDDTを頭から背中、体中にかけて、みんなが真っ白になって下船しました。函館に親戚がおりましたので、しばらくそこでお世話になりました。

父の仕事の関係で、あちこち転勤して歩きました。小学校は薬取・虹別・美留和・白人と4回変わりました。どの学校でも一度もいじめられたこともなく、皆優しくしてくれましたので、楽しかった思い出ばかりです。

引き揚げが終わり、引き揚げて来た島民の声が四島返還の声が広がる中、「墓参」「ビザなし交流」「自由訪問」の事業が始まりました。

今までに、日本から2万人以上の人々が四島を訪問しています。また四島からも9千人程が日本を訪れ交流を深めています。私も自由訪問・墓参で択捉島・国後島・色丹島を何度か島を訪問しました。

懐かしい故郷、薬取村を訪問した時の事をお話いたします。現在は、6年前から「えとぴりか」という北方四島交流等専用船舶で四島を訪問しています。私が行った一番先の頃は、北海道の実習船か借上げ船で四島に行っておりました。

朝9時に根室港を出港し、1時間10分程がちょうど中間ラインです。北緯43度東経145度あたり。そこでロシアの国旗を掲げます。それから2時間30分程で国後島の古釜布沖に到着、入域手続きをするため係員が来るのを待ちます。係員と一緒にロシアのハンターが2人乗り込みます。択捉島には、熊がいるのでハンターと一緒にないと危ないんですね。手続きが終わり、船は国後水道を通過して次の朝、薬取沖に停泊します。すぐ目の前に薬取浜が見えても、港がないので降りられません。船には伴走船が付いてきますので、本船から伴走船に乗り換え、又7～8人でボートに乗り換えて薬取浜に上がります。何回も繰り返して皆さんあがるんですね。

私がいつも思い出していた山、川は昔のままの姿で私達を迎えてくれました。私はボートから砂浜に上陸した時、なぜか涙が止まりませんでした。村の皆も感激で言葉も無いようでした。何処かで「ただいま」と言う声が聞こえました。沢山あった家は何ひとつありません。ただ砂浜と草藁になっていました。家はみんな壊されたり、焼かれたり、燃料に使われたと聞きました。また日本の影を残さないためとも聞きました。

村のみなさんと墓地に向かう途中「この辺りに役場があったね」「この辺りに井戸があったね」

「この辺りは〇〇さんの家があったところだ」と言いながら、当時を思い出しながら歩きました。住んでいた頃、お墓は小学校の横の小高い丘を暫く歩いた所にありました。でも今は平らな所に移されています。お墓に行く途中、本当に笹の間を道もない所に行くんですね。足元にコンクリートの様な物がぶつかります。それは何かと思いましたが、お墓の土台です。小高い丘から墓石を下に落としたそうです。全部持って行かれなかったそうで、残った台座の上を歩きました。それが足元にたくさんありました。笹が繁り茂みの中を手探りで、ようやく墓まで辿り着きました。

お墓は、みんな草の中に埋もれていました。皆で草刈りして、慰霊祭の祭壇を用意し、近くに咲いていた花を沢山とってきて手向けしました。読経の中、永い間のご無沙汰をお詫びし、一人ひとりお参りをしました。本当に永い数十年間、島を守って下さっているご先祖様、どんなに私達が来るのを待ちわびていたことでしょう。

帰りに朽ち果てた今にも倒れそうな二つの門が遠くの草の中に見えました。門が学校があった所を教えてくださいました。また大きな松の木が風雪に耐えて残ってありました。そこはお寺があった所を教えてくださいました。

当時住んでいた頃は、川の向こうがハマナスの群生地ですごい綺麗だったんですね。でも今は、村があった所もハマナスの群生地になっていて生態系が変わりつつあるのを実感しました。

私は、何も開発されていないのに何故かホッとしました。村には数人の警備兵とその家族が何人か住んでいました。現在は、環境保護地区になっていて人は住んでいません。私達が訪問するのを待っていたかのように、ロシア人が花咲カニを山のように持ってきてご馳走してくれました。ロシア人の優しいおもてなしの心に感謝して、花咲カニをご馳走になりました。とっても美味しかったです。薬取の味でした。

近年、日本の領土でありながら、周辺の国々が領土権を主張してきて、厳しい対応が求められています。韓国とは島根県の竹島問題、中国とは尖閣諸島問題、そしてロシアとは北方領土問題です。

ソ連が北方領土を不法占拠してから、72年が経ちました。今では多くの島民の方々がお亡くなりになっています。北方領土の返還を夢見ていた人達です。どんなに無念だった事かと思えます。

17,291名いた島民も、今では6,100名程になってしまい、平均年齢が82.2歳となりました。北方領土問題については何も進展しておりません。ただ、共同経済活動だけが優先事業として先行していくように思います。

皆様方を初め、全国の多くの皆さんが返還運動を続けております。私が住んでいる帯広でも、氷祭り・平原まつり・北方領土の日2月7日・パークゴルフ大会・北方領土学習会等の時には署名活動・返還運動を行っております。

一人ひとりの署名活動、返還運動が国民の声として、国を動かし早期返還に繋がるものと思えます。どうぞ、みなさん北方領土を忘れないで下さい。北方領土に感心を持って下さい。北方領土は、島民の島だけではありません。美しい島、資源ある宝の島、北方領土は日本固有の領土です。一日も早く、両国が平和条約を結び、北方領土が日本に返還になり、安定した友好関係が持てるよう願うばかりです。

最後に「北方領土、わが故郷は、近くて遠い思い出の島」みなさん、今日は私のつたない語りを聴いて頂き有難うございました。これからも皆さん、ご健康に気をつけてお過ごし下さいませ。

志発島元島民二世 神 林 美 砂 さん

おはようございます、只今ご紹介いただきました神林美砂と申します。本日はお集まり頂きましたことにお礼申し上げますとともに、北方領土返還要求運動にご理解とご尽力いただいていることに敬意を表します。

本日、ここ山梨県でお話しする機会をいただきましたので、はじめに少しだけ関連のあるお話しをしたいと思います。

富士山の美しさや雄大さは日本人・外国人、皆知るところです。各地に〇〇富士。と呼ばれる山があるように、国後島の爺々岳を国後富士と呼ぶ元島民もおります。国後島、択捉島は火山が連なっていて温泉も昔からたくさんあり、山の側にはこちらと同じように湖や沼が多く美しい景色が広がっています。

戦前国後島では、吹き出る硫黄を木材にいぶして腐食を防ぐ加工をして荷出ししていたそうです。温泉は今も変わらず湧き出でていて、川の水で温度調節するような自然そのままのものもありますが、近年では施設や道路が整備され、現在住んでいるロシア人はもちろん外国人観光客も受け入れる準備も進んでいるようです。新しい情報では、10月1日がロシアウォーキングデーということで国後島の40人が泊山のカルデラ湖までのハイキングに参加したそうです。

また、エネルギーとしても活用していて、国後島、択捉島では火山の地熱を利用し発電して電力を賄っています。

私は、根室で生まれ根室で育ちました。母は歯舞群島志発島の出身です。子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には大きくて怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では、小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり、地理的なこと歴史、戦前の暮らしぶりなどを学びました。

私は数年前から「元島民二世の語り部」の活動をしています。現実問題として私のような二世が活動していかなければならなくなってきました。

戦後72年を過ぎた現在、北方領土が占領された時10歳だった方も82歳。後ほど島を訪問した時の話でも触れますが、年々一世の方の訪問も少なくなり現場で当時のお話を聞ける機会も減りました。「記憶と島への想いを引き継いでいく」という二世の役割も困難になってきています。先程の安田さんのようにお話しできる方も少なくなりました。

返還運動に関わってから四半世紀が経ちました。その間、様々な機会を与えられました。本日は私が見聞きしてきたこととお話ししてまいります。

初めに北方四島の概要については、安田さんがお話してくださったので重複しないようにお話しします。

戦前の北方四島には17,291人が住んでおりました。漁期には多くの出稼ぎの人もいたそうです。島民は海からの豊かな恩恵を受け暮らしていました。

当時は冷凍技術がありませんから、獲れた魚介類・海藻類は塩蔵や乾燥、また缶詰に加工していました。みなさんお馴染みの昆布はとても良質なものでした。今もですよ。志発島では昆布と並んで乾燥帆立貝柱もたくさん作っていました。学校帰りに干してある貝柱をポケットいっぱい詰めて、食べながら帰ったそうです。

昭和の初め択捉島・紗那では豊漁が続き景気が良く、畳の下にお札が敷いてあったという話も

聞きましたし、三越の通販で買い物をしていたそうです。噴水やテニスコートのある家もありました。またカニ缶の酸化防止の白い紙は、国後島の缶詰工場が始まりと言われていました。

歯舞群島と国後島は主に根室の経済圏で、物資は根室から入っていたそうです。択捉島には函館からの船が入っていました。先程お話しした単冠湾は冬でも結氷しなかったので1年中物資や郵便が途絶えなかったそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先ほどの温泉の話もそうですが雄大な自然です。解りやすくいうと、知床が何十もある感じです。山・川・森・高山植物・滝・湖・湿原・温泉、そこにはクマ・海鳥・シャチ・鯨・ラッコなどの生き物が生息しています。現在もロシア人居住地区を除き、ほとんどが手付かずの大自然です。近年、ロシアの国家予算が付き開発や整備が急ピッチで進んでいます。また資源の乱獲で、これらは壊されつつあります。

私は、ビザなし交流の始まった年である平成4年に島に行く機会を得ました。先程お話ししたような子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。とにかく行って見てみよう。と思ったのです。

初めて見た国後島・古釜布。霧の中、湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島を、なぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」で歌われている「遙かくなしり」なのか…。錆色の景色を見て一番初めに感じたことです。択捉も色丹も同じでした。

しかし天気が良くなると、青い空、あふれる緑・すばらしい自然が目にとび込んできました。ロシア人も明るく、子供のころから持っていたイメージを捨てるのにはそれほど時間はかかりませんでした。今では島に住むロシア人とSNSで繋がっています。町や空港を結ぶ幹線道路が舗装になった、入学式、夕焼け、クマに会った、山に初雪等々すぐに写真や動画が見られます。この頃には考えられないことです。

この初めての訪問で私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。私たちは運悪く嵐に合い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこはおじいさんの故郷の村、内保の沖合でした。嵐に合わなければ目にもすることもなく、夜中に航行するはずの場所でした。

大きく揺れる船で、島のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。色々思い出していたのでしょう。天候が回復し、夜中に船は碇をあげました。その際、漁師だったおじいさんが「あの山の雲が取れば風向きが変わる。そうしたらGOだ。」と船長さんにアドバイスしたそうです。おじいさんは真っ暗で揺れるデッキに出て、島に眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。

私はおじいさんに言われました。「ねねこ～（おねえちゃんと言う意味です）、オレはもう島に来られない。後は頼むぞ」「そんなことないよ、また来られるから」と返しましたが、胸が一杯になりました。サケは生まれた川に戻ります。「サケになってでも帰りたい」と、言っていたが叶うことなく亡くなりました。

私はこれまでに3回志発島の元居住地に行きました。初めての時は、同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ。」と教えてもらったり、初対面の方から亡くなった叔父や叔母の話の聞きました。

占領された1945年9月には、母の家族は親戚を頼って疎開し、島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて、ソ連兵が島の反対側に行っている間にその船で女・子供だけでも根室に逃がそう。ということになり、地区の人たちが乗りきれないほど集まったので、さらに小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後、初めての大量の引き揚げということ

で、島の様子を知りたい役所や多くのマスコミが船を迎えたそうです。

その船に乗っていた一家の末の妹さんが私に言いました。「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったかもしれないのよ。」と。

2011年6月、2度目に志発島を訪問した時は3月の東日本大震災の津波で砂浜にはちぎられた海藻が高く積もり、浜辺に壁が出来たようになってずいぶん様子が変わっていました。変化があるとわかりにくいので、一緒に参加した二世の人たちと、お互いの家の場所を皆で確認することにしました。記憶の引き継ぎが難しくなっていることを実感しました。

3度目の訪問の2014年は、従弟と参加しました。同じ地区の80歳を超えた一世の女性も三人いてお話を聞くことができました。私のお爺さんの船で根室に逃げてきた方々です。一世の方の参加が少なかったことで困ったのは、上陸地点です。港等はなく砂浜なので、岩礁などに注意して近づきます。そのポイントの情報も二世間で共有して次回に備えています。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々はただただ島を見ています。私たちには見えない昔の景色や、家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切くなります。私はできる限り、現地で元島民のお話を聞くようにしています。島への想いをより強く感じるからです。国後出身のご兄弟は、お母様の話と自分たちの記憶を活字にして残しています。

皆さんもそうだと思うのですが、故郷というのは年を取れば取るほど懐かしく、恋しくなるもの、ですよ。年を取って自分の生きてきた月日を振り返ったり、懐かしんだりすると必ず故郷を思い出します。自分たちの意志ではなく出てきたままで、自由に行けなくなればなおさらです。

島からの引き揚げ方は様々です。歯舞群島の島々や国後島の北海道に近い地域などからは、嵐の夜やソ連軍の見張りが手薄になった時などに根室目指して小舟で逃げてきた人も少なくありません。命を失った人もいます。若い女性はソ連兵に見つかったら乱暴されるかもしれない。と、服の襟に毒を練り込んだ団子を忍ばせていたそうです。また送りこまれてきたソ連人と共に暮らし、寒い時期に劣悪の環境の引揚げ船で樺太経由で函館に送られた人。なかには村を出て、函館に着くまで3ヶ月掛かった人。家の子供が皆小柄なのは、引き揚げ時とその後の栄養が足りなかったという人。病気になったり、定住地がなかなか決まらず引き揚げ後も大変苦労されたそうです。

東日本大震災の後、岩手県に住む国後島出身の方にお見舞いのハガキを書きました。その方は、内陸にお住まいなので大きな被害には遭っていませんでしたが、後でお手紙をいただきましたのでその一節をご紹介します。

「特に、福島原発周辺の被災者の避難所生活を思う時、住み慣れた国後島を追われ、樺太の真岡の収容所で家族8人とともに過ごした日々を思い出します。」というお手紙です。自らの意志ではなく故郷を離れ、先がどうなるのか判らないということが引揚げの時の自分たちとダブったのでしょうか。同じようなことを他の元島民の方もおっしゃっていました。

今年は春の首脳会談で、航空機での墓参実施と共同経済活動の具体化が話されました。この二点に関して墓参は実施され、経済活動は調査団の派遣など進展状況は領土問題本体と比べると信じられないものです。問題解決に結びついていく事がらになっていくことを願います。

私たち2世や3世は「後継者」と呼ばれています。文字では「後を継ぐ者」と書きますが、元島民の後継者として何を継ぐのか？と考えます。70年以上進展のないことの後を継ぐ。とても重いものです。

「島への想い」をしっかり継ぎ返還運動をしていくこと、それが後継者の役目です。それぞれの元島民が抱いている「島への想い」を聞き伝え感じ、一日も早い解決を目指し力にしていきたいと考えています。

本日は本当にありがとうございました。

皆さん始めまして。私は金田慎吾と申します。私は、北海道の石狩市にというところに住んでいます。石狩市は札幌市の隣の町で、石狩川の河口のある街です。主な特産物はサケですが、それ以外には特にこれといった産業の無い、札幌市のベッドタウン的な街です。

今日は北方領土を語る会ということで、ご承知の方も多いと存じますが、北方領土問題とはどのようなものなのかを、まずは簡単にお話しさせていただきます。

北方領土は択捉、国後、色丹、歯舞群島で構成され、北方4島とも言われています。その面積は5,003.1キロ平米になります。皆さんの住んでいる鹿児島県の面積は約9,200km²ですから、この北方4島の島々だけで鹿児島県の面積の半分以上にもなります。これは1つの県にも匹敵するほどの面積です。終戦当時はこの北方4島に17,291人の人が暮らしていました。

そこに昭和20年、第二次世界大戦の終戦後8月28日から9月5日にかけてソ連軍が侵攻してきたのです。

ところで、皆さんは第二次世界大戦の終戦の日って何月何日か知っていますか？知っていますよね、当然8月15日ですよ。ソ連が侵攻してきたのは終戦の日よりも後の8月28日からなのです。でも、ロシアは「終戦の日は、戦艦ミズーリ号で日本が降伏文書に調印した9月2日である」と回答したのです。私は終戦の日は8月15日以外の日を聞いたことがなかったので、こんな認識もあるのかと。国によって考え方や終戦の日の捉え方も違って来るんだと。確かに、正式な調印の日が終戦の日だと言われると、決して間違いではないとも言えます。日本の中だけには分からないこともたくさんあることを学びました。ただ、ポツダム宣言を受諾して無条件降伏した国の領土を、かすめとるようなソ連の行動には憤りを感じずにはられません。

ソ連に侵攻された後、元島民の方は2～3年間島に住んでいましたが、その後強制的に島を追われることとなります。よく島から引き揚げという言葉が使われることがありますが、その実態はそんな生易しいものではなく、現実には脱出と強制送還という過酷なものであったと聞いています。具体的な内容は元島民の河田さんに譲りますが、こうして元島民の方は自分の故郷を追われてしまうことになりました。

ちょっと想像してみてください。ある日突然、ここに皆さんが住めなくなることを。鹿児島は他の国が統治するので、他の地に移住しなさい、なんて言われたらどうしますか。家も、仕事も、学校も、お墓も、なにもかも捨てて、今すぐここから出て行きなさい！・・・ここは、これから違う国が支配します。なんて言われても、困りますよね。どこへ行ったらいいのか、仕事は？学校は？住むところは？明日からどうすればいいのか？想像してみてください。途方に暮れますよね。でもこんなことが実際にあったのです。これが北方領土問題なのです。

今の自分にあてはめて、想像してみてください。今、住んでいるこの地を着の身着のまま出て行くことを・・・。北方領土に住んでいた人たちの苦労が、そしてどれだけ大変な思いをしたか。おそらく今、様々な災害などで避難生活している人も同じような状況でしょう。でも、それが70年続いているのです。特にあの時は終戦直後ですから、親戚や知人を頼ってもみんな大変な時で、迷惑をかけることもできない。その辛さたるや、私たちの想像を遙かに超えるものがあったのだらうと思います。

沖縄も終戦後アメリカの占領下にありましたが、住民はそこに住むことが出来ました。今でも

米軍基地の問題などがあり、沖縄の人たちも本当に大変だとは思いますが、北方領土の人たちはそこに住むことさえ許されませんでした。こんな理不尽なことはないです。

いきなり住んでいる所を追われて、そこに行くことすら出来なくなって、生活の基盤を根こそぎ奪われたのですから。誰でも言います。「ふるさとを返してくれ」と。「家を、土地を、お墓を、思い出を、私たちのふるさとを返して欲しい。」と。ただそれだけです。しかし、いまだ元島民の願いは叶えられません。島に帰りたくて、帰りたくて、願ひかなわず亡くなった人も、たくさんいます。それもそのはず、終戦からもう70年も経ってしまいます。当時20歳だった人も、もう90歳です。私たちは急がなければなりません。元島民の人たちがまだ生きている間に、北方領土を返してもらわなければ、意味が無いのです。

そして、この北方領土問題こそ、国の都合で元島民の方々に辛く悲しい思いをさせたものであるといえると思います。人生を狂わせられた人の数で言えば、北朝鮮の拉致問題でさえも、北方領土問題の比ではありません。私は、この北方領土問題が、国を挙げて、真剣に取り組んでいかなければならない、重大な問題だと考えております。

ただ、人生を狂わせられた私の母は、北方領土から引き揚げて来たおかげで、私の父と出会い私が生まれました。人生が狂ってしまったおかげで生まれた私はちょっと複雑な心境で、逆に旧ソ連に感謝しなくてはならないのかもしれませんが、それはまた別の話でやはり正すべきものは正さないといけないと思います。

私の母は昭和4年生まれで、今年87歳になりますが、一昨年私の娘、つまり孫と一緒に国後島に墓参に行ってきました。孫と一緒に自分の故郷に行けたのは、母にとってとても喜ばしいことであったようで、その時の話をとても嬉しそうに話してくれました。また、私の娘もとても貴重な体験をしたと話してくれました。

特に娘が驚いたのが、自分のおばあちゃんが現地のロシア人ととても流暢なロシア語で会話していたということでした。確かに、おばあちゃんがいきなり外国語をペラペラしゃべりだしたらびっくりしますよね。娘はおもわず、「ばあちゃんカッケ〜！」と言ってしまったそうです。

母がロシア語を話せるのは、終戦後もしばらく北方領土にとどまり、数年間ロシア人たちと生活していたからだそうです。今年は母と私と私の姉の3人で国後島の母の故郷である古釜布というところに墓参に行ってきました。墓参なのであくまで墓参りということで、行くところも制限されていましたが、やはり自分の故郷に来たということで、母は本当にうれしそうでした。

政治的な話では、1956年に、日本と旧ソビエト連邦との間で、平和条約締結後、歯舞、色丹の2島を日本に返還するという内容の日ソ共同宣言が交わされました。ロシアはソ連の継承国としてその意義を認め、平和条約締結後に2島の引き渡しは行うということを言っております。しかし、これは返還ではなく、あくまでロシア側の善意による引き渡しである、と主張しています。戦争の結果としての領土の帰属は、あくまでロシア側にあるという考え方です。

したがって、残る国後、択捉両島は引き渡さないと考えています。しかし、領土の引き渡しを屈辱的外交と捉える国が、日ソ共同宣言で2島の引渡しを盛り込んでいるということは、そもそも北方四島の占領の過程に多少の引け目を感じているからに違いないと、私は思っています。

日本としては、日ソ共同宣言については、2島の引き渡し後に残る2島の引き渡しについて継続協議するものと捉えており、ロシア側とは基本的な考え方で対立しています。

12年前の10月19日、モスクワ市庁舎で開催された「日ロフォーラム」では、当時は衆議院議員だった鳩山由紀夫さんが、「もう一度1956年の日ソ共同宣言の原点に立ち戻って考えることを提案する」と述べ、河野太郎衆議院議員が「日ソ共同宣言から日ロ両国がともに歩み寄り、例えば、

国後島と択捉島を合わせた面積を1／2にし、択捉島に国境線を引くという方法もある」と、具体的な提案をされました。ただ、ロシア側の対応については、この問題をできるだけ棚上げしたいという意図を全体的に感じました。とはいっても、日ソ共同宣言から節目の50年を迎えた年に行われたこの「日ロフォーラム」は、北方領土問題の解決の糸口となるような期待を持たせる有意義な大会でした。

私の個人的な見解としては、歴史的にもソ連の4島占領は侵略行為であり、国際的に見ても不当なものであると思います。しかし、両国が「4島だ」「2島だ」と主張し合っていたのでは、何時までたっても解決の道は見当たらず、元島民の方が生きているうちに問題が解決するとは思えません。北方領土に住んでいた方たちに故郷を返すという最大の目標を実現させるためには、早急に領土返還に向けた現実的な対応を行うべきだと思います。そして、現実的に解決することを目指すなら、両国が互いに譲歩し共に納得できる具体的な解決方法を提案し続けることが大事なのではないかと、モスクワ訪問で強く感じました。

広島、長崎に落とされた原爆に今なお苦しめられている人たち、ふるさとを奪われて今なお戻れない人たち。戦争という国家間による暴力行為は未だに国民に痛みを残し続けています。このような事が二度と起こらないように、私たちは後世にこれを伝えていかなければなりません。これから、みなさんが、戦争や原爆についてお子さんやお孫さんに語り継ぐ時、この北方領土問題についてもひと言申し添えて下さい。それだけで、今日私が皆さんの前でお話させていただいた意味があったかなと思います。

最後までご静聴いただきまして、ありがとうございました。

ただ今、ご紹介をいただきました河田でございます。出身は、歯舞群島の多楽島ですが、今は北方領土が間近に見える北海道の根室市に住んでおります。

この度は、平成29年度「元島民の北方領土を語る会」にお招きいただきありがとうございます。実は私、鹿児島県に北方領土関係でお邪魔したのは、今回で4回目でございます。今日は奄美の方からお出でになっているということでございますけれど、奄美の宇検村にも行ってきましたし、それから奄美市になってからもお邪魔しました。鹿児島県の中で今日お出でになっている方と一緒にアピール行動やらせていただきました。

また、毎年全国各地から北方領土の現地視察や関係行事等で、大勢の方々が根室市にお出でいただいております。その時お会いした方、ご指導頂いた方が本日お集まりの皆様の中にもいらっしゃるのではないかと思います。

鹿児島県と北方領土の関係について少しお話してみたいと思いますけれども、江戸時代に薩摩藩を通じまして、根室や北方領土で採れた昆布が外国に輸出されております。また鹿児島県出身の「黒田清隆」。この方は、明治初期に北海道の開拓使長官として色々と北海道の開拓に携わった方です。

そしてこの方の考え方に基きまして、1875年の日本とロシアの間で樺太千島交換条約が締結されました。この人の考え方です。そして根室市には、黒田清隆から名前をとった清隆町という町があります。

またその他にも「日ソ中立条約」を締結致しました時に、一生懸命努力していただいた方が東郷茂徳さんという当時の有名な外交官がいます。こういった方達が居て、北方領土と鹿児島県とは深い繋がりがあるのだということを一言お話しさせていただきました。

北方領土は歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島をもって北方領土、北方四島と言っておりますけれど、北方四島と言うと島が4つしかないのかという人がまだいらっしゃいます。4つだと私の住んでいた多楽島が出てこないわけですね。歯舞群島で終わっちゃう。多楽島は、歯舞群島の5つの島のうち根室の納沙布岬から一番遠い所にあります、45km離れておりますけれども多楽島です。

そして、勇留島、秋勇留島、志発島、これが歯舞群島で一番大きい島、そして私の住んでいたわずか12km²くらいの小さな島が多楽島でございます。多楽島も含めまして、色丹島、国後島、択捉島でどれくらいの方が住んでいたかと申しますと、約17,000余人が住んでおりました。

私の島のような小さな島は、わずか10km²よりない所に、1,500人くらいの方が居たのです。歯舞群島全部含めてですね、約100km²。よくちっぽけな島と言われます。ですけれども、北方領土全体は世界の三大漁場と言われるような漁業資源の豊富な所です。今もそうですけれども、ただ採りに行けないだけの話です。こういう資源に恵まれまして、特に歯舞群島は昆布漁が盛んでした。この小さな100km²の中に、5,000人以上の方が居たのです。約17,000人以上の中で。

この100km²は根室市の面積に入っています。根室市の面積はわずか515km²。5分の1が、今以てソ連、ロシアに不法占拠されているのです。そういう様な状態になっておりますのをご理解いただきたいと思います。

私が生まれた島のことについてお話しますけれども、島は小さくてこの辺もそうだったと思うのですが、もちろん電気もなかったです。島には1,500人以上の方が住んでいて、私と一緒に国

民学校に通っていた人が240人、クラスは8学級ありました。今の中学2年生ぐらいまでで6年生を卒業すると高等学校になるのです。

戦争がだんだん厳しくなるに従って、昆布を食糧にするだけでなく火薬の原料にすると。食糧にできない様な雑な昆布を乾燥させて、草を積んで置くような大きな室に山積みにしてあるのです。そして天気の良い日を見計らって、それを浜に土手の様に積み上げて塩をつけて焼くのです。太平洋戦争以前は薬品になったヨードを。ところがこれは火薬の原料になるわけです。ですから、「カリ増産、カリ増産」と言われて、とにかく学校に行かない子供でもやる仕事がそれなりにあったのです。

学校に行ってだんだん学年も上がってきますと、もう大人にあてにされてですね、大人同然の仕事をさせられたものです。そういう大事な時だったのですが、だんだんと戦争が厳しくなってきた、当時は食糧とか色々なものを全部配給された時代がありました。米なんかも配給です。1人1合だとか2合だとか、そういう大変な時です。私の親戚が根室に居たものですから、暇な時にはよく遊びにきたものです。そうするとだんだん厳しくなると、食糧が、パンなんかを作って食べていました。島ではそういうことはなかったですね。

それはなぜかと言うと、「カリ増産、カリ増産」とカリを作っているものですから、戦争に荷担しているわけですね。特配というのがあります。ですから終戦になるまで、それほど私は米に不自由したという記憶がないですね。

やがて戦争がだんだんと厳しくなってきました。昭和20年7月15日。根室は14、15日に米軍の空襲にあって、街の中心部80%が焼けたのです。そしてちょうど1カ月後に終戦になりました。

この空襲の時、私の家族もたまたま根室に長い間病気の弟がいたものから、病院に居た家族達は逃げました。島では当時8人の家族で、祖父と父親は毎日の様に昆布を採れなくなりました。陸で仕事をする人が居なくなったからです。ですから魚の番とかそういうことをやって、毎日の様に根室通いをしていました。島に残った私は、その時小学校5年生。そしてまだ学校に行っていない妹と2人だけ残ったのです。その時に、父親から言われた言葉です。まあ、今でも忘れないです。私はその時何の為にそうされたのかなと思ったのですが、風呂敷に貯金通帳と印鑑を包んで、私の腰に縛ったのです。そして「いつまでもあると思うな親と金」と言って決死の覚悟で空襲真っ最中の根室に向かったのです。

船を米軍に見つからないように川の中に隠して、相当な距離を歩いて根室市内まで帰って来て、逃げたらたまたま病院の看護婦さんに会って、そしたら向こうの方に逃げたよと言うのでそこまで追いかけて行って、見つけて運良く帰ってきました。

帰って来て「さあこれからまた昆布漁をやるか」と言っている矢先、1ヶ月したら終戦宣言。8月15日終戦になりました。その時も、私の父親は昆布漁に出ていた。まあ島に居る人は皆昆布漁に出ていたのですが、帰ってくるまで全然状況がわかんないわけで、今のように電話があるわけでもないですし、無線があるわけでもない。夕方帰って来てからその話を聞いたのです。

私は父親の様子を見ていましたけども、昆布を採ってきて船を海岸につけたのですが、その話を聞いて浜に座り込んでしまいました。もう全然仕事をする気力がなくなってしまったのです。私の父親も当時は兵隊に行っていましたし、その頃は在郷軍人会として青年団を指導していたものから、本当に座り込んでしまった。どこの家もみんなそうなったと思います。

やがて時間が経って、いつまでもこうしてはいられない、また一生懸命働いて頑張っていこうやと言っていた時、思いもよらないソ連軍が上陸してきたのです。

ソ連軍が上陸してきたのは、昭和20年8月15日に終戦になりまして、その後まもなくカムチャツ

カの方でも終戦がありました。北方領土にきたのは昭和20年8月28日に択捉島に上陸したと言われております。

そして9月に入って、国後島、色丹島、9月5日までには歯舞群島まで全部占領してしまっただけです。当時、多楽に来たとかあるいは歯舞群島にも色々来ているのですが、言う人によってはソ連が上陸したのは9月3日だったとか、2日だったとか色々言うのです。ですけど、私は親達の話聞いてそうだと思うしております。当時はカレンダーがないのです。手作りで日めくりを作って、代用のカレンダーがあった時代ですね。情報もしっかりしてないのです。

ところがある時に、多楽にも日本の兵隊さんがおりました。三重県出身です。後にその人達とも北方領土関係で合流する様になりました。たまたま、田中さんという方が隊長をしていたのですが、その人の書いた私記を見ましたら、9月4日となっております。そして、根拠がありました。9月4日に何をやってたか。それはですね、日本は戦争に負けたわけですから武器がたくさんあります。弾薬関係でも、2年分も3年分も島にあったのです。これは、天皇陛下から預かっていたものだ、だからお返しするという儀式をやったのです。調べてみたら4日だった。そこに何か情報が入ったのです。こういった情報はわかりませんが、後に兵隊から聞いた話ですが、見慣れない船が北の方に着いたから偵察に行ってこいということで、磯田さんという方が私の隣の家の馬に乗って、偵察に行ったのです。

島は真っ平らな島です。高い所でも15mか20mもあるかないかのそんな所ですけど、北側から上陸してくると南側から偵察に行って、ちょうど小高い所に出くわしたらしいです。そして、その磯田さんの馬に隊長を乗せて私の家の前を、手綱をきちっと持って胸を張って、日本軍の所に帰るのに案内するのを見ていたのです。その時の隊長の姿をしっかりと見ておまして、どうだったかという、銃を構えてあっちにこっちに何か起きないかと、キョロキョロしながら臆病に見えたのを覚えております。

その後二人の兵隊が銃を持って、家の中に入って来ました。どこの家も2人1組になって入ったらしいです。私の家は、新築してから1週間から10日ぐらいしか経ってないまだ新しい家でしたが、そこに土足で入って来たものだから、子供ですから恐ろしいのもそうですけど、家に土足で我々が入ったらどれほど叱られるか判らないですね。そこに土足で上がってきたのです。そして何を言ったかという、後で母親に聞いてみたら、アメリカの兵隊が居ないかどうか、日本の兵隊を匿っていないかどうか、武器を隠していないかということを知りました。

その後です。子どもにも分かるようなことを言いました。「トッキートッキー」これは腕時計が欲しいわけです。ちゃんと必要な言葉を覚えてきています。そういう物は、今の様にたくさんあるわけじゃないです。それともう1つは、今の様に皮のバンドとかないですから。うちの母親もそういう物はなくて、ゴム紐で付けていました。そして割烹着をさっと着て隠してしまうと、それがなくなります。そしてまた分かることを言いました。「サッキーサッキー」これは酒です。酒は残念ながら見つかりました。

うちの祖父はそんなにたくさんは飲まないですけど、夜は晩酌をしていました。ところがその頃は、焼酎とかにしても酒が手に入らなくなっていました。それで母親が、ご飯と麴を混ぜて甘酒を作ったのです。甘い時には子ども達も飲めるのです。それがだんだん発酵してくると、素晴らしい酒になります。それを瓶に入れて戸棚に入れてあったのが、匂いで分かって見つかったのです。

そういう風にして、ソ連軍が入って来た時に私達はどうしていたかという、母親の後ろに私を先頭にして子ども5人が隠れるようにして見ていました。子どもには何もしませんでしたけど

も、とにかくそういう状況は子どもながらに恐ろしいと思いました。そういう時に、大人の男の人が何を一番心配したかという女性です。血気盛んな男性は二十歳を過ぎると皆兵隊に行きますね。ところが女性は居るのです。女性は何をされるかわからないということで、隠したのです。隠すと言ってもそんな大きな家もないですが、とにかく男装させたり、場合によっては顔に泥を塗ったりして隠したのです。この島には若い女性は居ないと、そういう風にして時間が経って、何もないと分かってようやく出てきました。

戦争に負けたと言っても、一番頼りにしていたのは若い兵隊さんです。しかし間もなく連行されていきました。後で聞いたのは、家がある三重県に帰ると言われたそうですが、シベリアの方に5年くらい抑留されたと。

ロシア兵が来てから外出も出来ない、何も出来ないのです。仕事も出来ない、夜は出歩かれない。そうしますと、島に居る人はだんだん不安になりました。夜陰に乗じて、今日も一艘こっそり抜け出したのです。10月頃は時期的に盛んに抜け出していました。しかし、何時でも出来るわけではないです。月明かりになると発見されますから、出来るだけ闇を狙って。それからもう一つ、海ですから波が良い時でないとは駄目なのです。

しかも、昆布を採りに行くような一人か二人が乗るような船ですから、エンジンが付いているけどせいぜい七馬力くらいのもので、それにこっそり夜、手に持てるだけの物を積み込んで、そしてお金を持ってない人も併せて乗せて、こっそり抜け出したのです。ところが陸からエンジンを掛けるわけにはいかないのです、発見されるので。ですから沖合まで手で漕いで行って、ここなら大丈夫だという所まで来たら、ようやくエンジンをかける。地図をご覧になると、樺太から根室の港まで直線にすると家の船で5時間ぐらい掛かるけど、最短距離を通らずみんな迂回したのです。ですから、根室の港目指しても太平洋側の方に出て、反対側に漂着してせっかく積んできた荷物も「命が欲しいのか、荷物が欲しいのか」と言われて、荷物を捨てて青年団の人達に助けられたという人が沢山いました。私の叔父さん達もそうでした。

ところが着いた人は良いですけど、72年経って未だに着いてない人も居ます。そうして終戦の年に、島全体の半分くらいの方が自力で脱出しました。それもその半分くらいの人とは歯舞群島、色丹島、国後島の人達です。択捉島の人達は出来ませんでした。かなり離れていますから。そしていつ帰っても良いように、家はそのままにして根室を目指して行ったのです。ところが、根室の町も終戦の1カ月前に空襲を受けています。当時、根室の町民でさえ入る家も何もないところ。焼けた鉄板でも何でも良いから拾い集めて、防空壕や物置の方に行ったら根室の町の人達が入っている中に、裸同然の格好で来たので当然入る所がない。みんなそれでも我慢をして、来年の春になったらまた島に戻るだろうと何とか生活をしました。

私も経験があります。馬小屋であっても、私の馬と一緒に生活をしなきゃいけない。そういう生活のこと、大変だったということ色々お話しましたが、あまり理解してもらえないのです。ですから私は、3.11の東日本大震災がありましたね。あの人達も大変だったのです。あれ以来、私はあのことも言いながら、「私達元島民も、あの様な生活をしたんですよ」と、とにかく国は一切援助してくれませんでした。食べる物も全て自前です。米なんか配給のない時、かぼちゃであろうが、じゃがいもであろうが、荒地を耕してそして自分で食糧を確保するのです。そういうことを何年もやりました。

島に残った人はどうなったか。昭和22年から23年にかけて、強制送還させられたのです。島に残って生活をするのであれば、ソ連人として帰化して残るか、そうでなければ強制送還という。私の家族も残っていたのです。私と下の弟だけが学校に行く為に、一足早くソ連の兵隊に断って

島を出たのです。ところが妹や弟も6人全員残っていました。

昭和22年の9月の初めに突然、島に残った馬を積みこめていた船が、その馬を降ろさせて「早くこの船に乗って！すぐに出る。そうしないと一生帰れないよ」と言われた。ですから、持ち物も風呂敷に包んですぐ飛び乗ったのです。ところが、根室に向かったのではなく、隣の島の志発島という少し大きな島があるのですが、そこに1ヶ月半ぐらい収容されてしまったのです。後で聞きますと、ソ連側の行き違いか何かで乗せる船が来なかったと。

やがて、10月末頃になってから船が来ました。残っていた人は、皆さんそれぞれ船に乗せられたのですが、ここでまた一つ念押ししますと、船と言うと今の人には客船だと思えるのです。違うのです。客船ではなく貨物船です。1万トンクラスの貨物船。それが来て乗せられたのではなく、積み込まれたのです。そういう大きな船ですから、島からずっと離れた所に停泊しています。そこまで小さな船で行って、今は荷物を積むにしてもコンテナとか色々あるので見られないですが、昔は荷物を積む時に網目の大きなモッコに全部入れて、それでウィンチで吊って積んだのです。

そういう形で荷物も人も一緒に入れられて、積み込まれたのです。貨物船のダンブルの中に。ここまで来るうちには、沢山乗ってきてしまっているのです。もう最後の方ですから。それで、うちの父親もダンブルの中に入ることが出来なく、甲板の上に居たそうです。10月の寒い夜、父は船乗りですから4～5時間もしたら根室の港に入れると我慢して居たのですが、だんだん時間が経って星を見るとどうも北へと走っている。これはおかしいと思ったら根室の港どころか、樺太の真岡に連れて行かれました。

その航海の中で大変だったのが寒さです。そして食べる物もない。これらも大変だったのですが、一番大変だったのはトイレだったのです。貨物船ですから、そんなにたくさんトイレはないですね。男の人ならまだ甲板で出来るので良いですが、女の人でもそれをしなきゃならない。波の良い時はデッキ張りの船ですから、波が洗ってくれる。ところがそういう時ばかりではなく、途中で時化してくると自分でしたものが波と一緒に頭からかぶさる。そういう大変な思いをして、真岡の港に入ったそうです。

また港に入ってもすぐに上陸出来なかったのです。先に行った人が女学校の体育館を改装して、畳2枚位の所に仕切って入れられたそうです。私の家族は、畳2枚位の所に6人位入れられました。その時も大変だったのは、もちろん食べる物ですね。またそこでのトイレ。トイレはどうしていたかという、当時その頃になると樺太も凍っています。ただ板を渡して、そのままそこにしたそうです。ですから、ここでも男の人はまだ良いですけど、女の方は大変困ったそうです。それからまた、子供もよく落ちたと。ですから、水をもらうのも行列。それからスープの様なお粥。それと塩辛い鰯とお汁。それくらいの食事しかなかった。

やがて、函館の方から日本の船が迎えに来てくれて、それに乗ることになったのですが、死んだ子供、死んだ人は乗せられないということになって、背負っている子供が死んだと判っていても、騒がないでそのまま乗せてきたと私の知っている人でもおられます。

もちろん、収容されている時に亡くなった人もいます。その人達は、どうされたか。私の母親達は仕事が忙しくて、そんなことを子供達に話す時間も何もないのです。決して良い話じゃないので、話しするのも嫌だったかもしれない。ですから私の母親も、平成13年に88歳で亡くなったのですが、亡くなる間際に言い出したのです。収容所で死んだ人達を、溝を掘ったところに転がしてある。それを見ても一握りの土も掛けてやれなかった、残念だと言っておりました。せいぜい話してもそれくらいです。それで大体状況が判りました。私の知っている人でも、妹を亡くしたとか色々言っていました。ですから、収容されていてもそういう状況でした。

やがて、函館に日本の船に乗って辿り着きましたが、ここでもまた大変でした。何をされたかという、「シラミ」と今言っても知らない人が沢山居ますけど、シラミのいない人なんて居ない時代です。頭からDDTをかけられて、真っ白にされて背中の中にも入れられて、函館に着いてから私の家族は何日もJRに乗せられて、根室に辿り着いて私がいる親戚の家に居ました。

どこの人もそうだったと思います。その時の格好を見たらとてもじゃないけれど、先ほど話した3.11の話どころじゃないです。叔父さんの家に私がお世話になってたので頼ってきましたが、「入りなさい」と言う状態ではなかったです。後で聞きまして、皆さんそうだったと思いますが、まず寒いのですが外で水を掛けてなんとか洗い流してもらって、ようやくその家にある着る物を借りて、着てから入れるくらい、そういう格好でした。ですから、私は着の身着のまま裸一貫ってよく言われますけど、あれ以上のものは未だかつて見たこともないですし、これからも恐らくないと思います。

その後の生活は、先ほども言いましたけれども、もう防空壕であろうと馬小屋であろうと、とにかく雨露凌げるところなら何処へでも入ったのです。自力で来た人達も、私の知っている人でも、当時馬を飼っているとその上に柱を渡して、立てかける草を積んで、更にその上に上がって生活をしたという人も居ますし、私も転々とあちこち動いたりしました。私は叔父さんがたまたま早く来ていたものですから、漁の番屋が秋ですから空いたので、そこへ居られました。

春になったら仕事に來ます。出なきゃならないのです。そして、次は馬小屋です。それからどうにか叔父さんがちょっとした家を作ったので、そこへ移ったのですが、そこに強制送還されてきた家族がきたものですから、とても一軒の家じゃ駄目ですね。なんとか冬を過ごしましたが、翌年にはまたそこから10kmくらい離れた所の空いた番屋に移りました。

移ってもやはりまた時期になると、漁をする人達が来ると、出なきゃならない。今度は行く所がないのです。それでうちの父親達は、その時何をしたかという、営林署に頼んで柱になるような木を腹板にしてもらって、昔の人は自分でそれくらいの家は建てますから、穴を掘って、柱を立てて、周りに薄い板を貼り付けて、屋根も何とかかんとかあり合わせの板、あるいはなければ白樺の葉使って家を作ったのです。

窓と言っても、当時の出来合いの窓をただはめるだけで、隙間だらけでした。そして下に敷く板がないのです。土の上なので虫がいます。夏のうちは良いですが、今頃になってくるとまわりから凍ってくるのです。ですから薬缶のお湯などは朝になると凍っているのです。そういう生活、そして食べる物もろくに無い。だから私はよく言うのですが、「人間ってどんな環境にも順応するものだね。食べる物もない、帰る家もない、寒くても我慢して、それで私達は死ななかったですよ。」寒くて腹が空いて死んだという人はそんなに居ないですよ。ですから、人間というのは、色々な環境に順応するのです。そういうことを繰り返しながら、なんとか生活を再生させて、私も家は10軒くらい転々としました。一ヶ所に1年も居ないことが何度あったでしょう。

私達が本格的に返還運動をするようになったのは、昭和40年くらいからです。私はまだ30代でした。それまでは地元根室で、何か行事があると四島を還せなどと幟を立てたり、色々なことをやっていました。

昭和40年に市役所の機構の中に領土対策を設け、その担当が私の友達だったものですから、何かあると手伝ったりしているうちに、やがて根室の青年会議所の若い人達を中心に、大体20人くらいの人でキャラバン隊を作りました。

当時車もろくにない、運転免許を持っている人もそんなに居ないです。免許を持っている人は運転しなさい。車を持っている人は車を出しなさい。着るものもなんとか紺系の上着とグレー系

のズボンくらいにしようと言っても、それもない。揃えたのは、帽子だけです。その帽子もある整備工場に行って、白い帽子を分けて貰いました。それに「還せ北方領土」とかマジックで書いて被って、唯一揃っているのがこれです。

そして、昭和42年、43年に北海道を太平洋側とオホーツク海側に分かれて2年キャラバンをしまして、3年目によく本州に入りました。函館から青森までフェリーとマイクロバスで渡ったのが初めてです。その時にももちろん東京も行きましたし、ここまでは来られませんでした、一番遠い所まで行ったのが三重県です。それはどうしてかということ、やはり三重県に元兵隊さん達が、いち早く返還運動をしてくれて、それを頼って行きました。

それまでは、私達の父親とか先輩の方がやっていました。ですから私が今入っている千島連盟、これも30年代に出来たのですが、これになるまでには色々な団体が出来ました。

色々とお申し上げましたが時間になりますので、最後にしたいと思います、先程から会長さんとか色々お二人からも言われておりましたが、歯舞群島・色丹・国後・択捉とあります。色々な歴史的にみても、国際法上で見ても紛れもない日本固有の領土なのです。そして、またこの北方領土問題というのは、元島民であるとか、あるいはまた一地域であるとか、それからそれぞれの地域によって一所懸命やっている人だとか、それだけの人達の問題ではないのです。一人一人の問題なのです。

そう言いながら、72年経ったのですが、先程も言われました様に、昭和56年に2月7日は北方領土の日と決められました。この「北方領土の日」すら、知らないとか関心がないとか言う人がまだまだ居ます。本当に残念です。

それから、やはりこれからの時代を担っていく子供達に知って欲しい。私達も今までは二世対策でしたが、今二世とタイアップして、三世、四世の対策をしております。ですから、県によっても県民会議の中に教育者会議が出来たり、あるいは学校の関係で一所懸命するなど。私は北海道の知事が初めて根室に来た時にそこで懇談した時、知事に「いくら勉強すれと言っても、勉強しなきゃならない環境を作ってもらわなきゃ困る。」ということで、高校入試の中に取り入れて欲しいとお願いしました。以来、高校入試の中に入れていただいております。

それともう1つは、高校・大学だけではなく、官公庁が率先して就職試験に問題を取り入れて欲しいと。そして、学校で勉強した、してないだけでなく、勉強しなければならぬ環境を作ることが一番大事ではないかと、そういうことをしてもらっております。先ほどもお話あった様に、だんだん広がって学校の生徒さん達も一所懸命勉強する様になりました。

あとは、皆さん方をお願いしたいのは、百聞は一見にしかずと申します。色々なお話聞くよりも、1回見た方が確かに良いと思います。ぜひ北方領土が間近に見える、納沙布岬に来て頂いて、本当に手を伸ばせば届くのです。「おーい」と言えば「おーい」と答えてくれそうな所に人の住んでいた島があるのです。ぜひ見て頂きたいなと思います。

いつから始まったかという、安藤石典の話ですが、あの空襲で焼けて町民の面倒を見なくてはならない大変な時期に、昭和20年12月1日付けで、マッカーサー元帥に今に繋がる北方領土返還の陳情書を出したというのですから、凄かったなと思います。こういう大変な中からやった大先輩が居るわけです。そして今に繋がる返還要求運動の狼煙を揚げたと、そういう人ですから、何回もお話されておりますし、みなさんもお存じだと思います。

それともう一つは、北方領土と鹿児島県の人です。色々深い関係があります。私達も一所懸命やりますが、みなさんにもどうかひとつ応援していただければお願い申し上げまして、終わりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。